

---

# 彼女は悪魔！

geinguns

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

彼女は悪魔！

### 【NZコード】

NZ8348D

### 【作者名】

gaga-i-nagabun-s

### 【あらすじ】

あらゆる手段を使って、男から金を巻き上げる女。しかし騙されても騙されても男は女を信じる。そして男を見守る女がひとり、一人、そんなコメディーです

なぜか落着きがなく、体をもぞもぞさせている女。

なぜだらう。

不思議になつて、思い切つて俺は聞いてみた。

すると彼女は

「関係ないでしょ」

ものすくべ睨みつけられた。

心配してあげたのに、そりやないでしょ。

あいかわらず彼女は落着きがない。  
じつとり汗もかいているようだ。

このビルの事務所は空調完備だし

まだ3月。外は暑いってほどでもないのに

彼女は汗をかいている。

気になつて仕事にならんぢやないか！

え？なぜそんなに俺は彼女のことが気になるんだって？

言わせんのか？好きにきまつてるからじゃないか、 、 、

かわいいし、やさしいし  
いいとこだらけだもん、 、 、 時々俺に向かってニコッと笑ってくれ  
るし  
彼女も俺のことは好きかも知れないし、 、 、 たぶん。

デスクに座り、パソコンに向かう彼女は  
何事もないように仕事をこなしている。

しかし、やつぱり落着きがない。

もつ一度聞いてみる。やつぱ心配だし、 、 、

「大丈夫？みゅきさん。汗かいてるよ？」

俺の言葉を聞いたみずきさんは、静かにマウスから手を放し俺の方を見る。

「野口君、、、ちよつと外で話しだれる?」

!-----!

おーとつとつ来たかーみずきさんからの誘いー。  
俺の優しさにやつと気が付いてくれたかー。

給湯室で一人きりで話す、野口とみずき。

「ふつちやけ言わしてもいいと、、、あなたにせびり思われてもいいから言つただけど  
あたしがいつも油汗垂らしながら、、落ち着きがなく仕事してるの  
は、、、

水虫なのよーーしかも慢性のねーーそれも足の裏全体に伝染して  
もうかゆくてしょうがないのよーー  
どんな薬つけても治らないしつーーーーー水虫ムカツくーーー  
つて、、、そんなこと言つたためにここに来たんじゃなこのよーー  
あんたー仕事中あたしのーとチラチラ見るのやめてくれるーーー  
正直キモい！  
あたしはあんたに見られるのも嫌なぐらい嫌いなのよーー  
やじりぐるのーとよく理解してくれるーー

俺は感動した。

彼女の秘密を俺に告白してくれたからだ。

感動しそうで後半はよく聞いていなかつたが、、、

みずきは勢い良く給湯室のドアをバタンとあけて出でていく。

一人取り残される俺。

そうか、、、そうだったのか、、、  
こんど彼女にプレゼントしよう。

水虫の薬と、五本指の靴下を。

部屋で水虫の薬をつけながら、五本指の靴下をはぐ彼女を  
想像する、、、

美しい、心洗われる風景だ、、、

事務所に戻りまた落着きなく仕事をしているみずきを見る。  
みずきもこぢらを見る。なぜか怒った顔だ。

こひして心を通じ合わせた俺たちは  
だんだんと深い関係になつていいくのだろう。

1 野口ひなちゃん（後書き）

かゆいの我慢できなーよね

## 2 施しようがない2人

「みずきさん、 、 みずきさん、 、 」

27回目の問いかけで彼女が振り向く。

「話しかけないでよ！ 知り合いでと思われるじゃない」

同じ会社の同僚なんだから、絶対知り合いでと思いつのだが、 、 、

「病気の方はどう？」

「ひるさいわね！ 昨日病院に行つたら

「これはひどい！ 手の施しようがありません！」

て言われちゃったわよー。」

「で、 言つことせ、 、 みずきさん、 不治の病なんだね  
かわいそう、 、 、 」

「あーあー海にでも行きたいなあ！塩水は水虫に効くって話聞いた  
ことがあるし、」

そう言い終わったみずきは田の奥に邪悪な光を宿し、にやつと笑つ  
た。

「やつだ！あんた」の前、趣味はネットで小説を書く」とだつて言  
つてたね？

「そ、そりゃんだよ！ファンタジー小説でねー龍の冒険つてタイト  
ルでね  
石像にされた父さんを助けに行くために、酒場で仲間をスカウトし  
て、」

「内容はどうでもいい、乗せてるサイトの名前とパスワード教  
えてくれる？

「えー、読んでくれるのー、もちろん教えるよー。」

パスワードを書いた紙をみずきに渡す野口。

そんなもの人に教えたならダメなのに、、、、

その夜、自分の部屋に帰った野口は早速パソコンの前に座る。

「よーしー今日も名作をかくぞーしかし毎日更新してもう200回  
目なのに  
なんで訪問者数がゼロなんだろう、、、」

そして今日もパクリに満ちた、文章を書きなぐる野口。  
無事書き終え投稿する。

「まあ、、、一応見ておこうか、、、アクセス解析、、  
頼む！一人でいいから来ておくれ！…」

画面に映った数字を見た野口は驚きを隠せない様子。

「ええー今日のアクセス数23982628人！…！  
昨日はゼロだったのに！…なんでえ！…！

、、、、、、、

せつかー・やつと来たか！！」

パソコンの前に立つくなる野口。

「やつと俺の小説が世に認められたかー！遅いんだよなあー！  
これで印税生活に入つてみずきさんとも結婚して、、、ぐふふ」

ふと見ると、メッセージが届いている。

「おおー・やつとくわんレターか？」「んうんー。」

開いてみるとこんな文章が書いてある。

「すうじですねー！アクセス数23982628人ー！  
やつと日本ーですよー！」

あなたの小説に感服致しました！

つきましては私共で出版させていただきたいのですがよろしくでし  
ょつかー、、、

でもうちは財政難でして、、、

出版の費用200万円を貸していただけないでしょつか！！

大丈夫！…本が世に出れば200万位すぐ取り返せますよーー！

いまずぐ200万円を振り込んでくださいーー今すぐ！ーー！

M出版社」

あーじて手を当ててうなづく野口。

「うむ！200万円ぐらに貸してやる！ー貸す出版社め！

まあ俺の小説が出版されればそんな金はすぐ回収できるがなーはは  
はははは

200万円を振り込む野口。

神よ、、、彼を救い給え、、、

そして野口は幸福な眠りについた。みずきの夢を見ながら、  
ちなみに夢の中のみずきはいつもメイド服だ。

「みずきさん、 、 、ほんとうにせせしめていこ人、 、 、 」

野口まつぶやく。

つぶやく野口の上には猫の額ほどの、都会の夜空が浮かんでいた。

2 施しようがない2人（後書き）

なんじや こりや

### 3 全て幻！

「ちょっと、会員番号170番の美人1号だけ? なに? お前の買  
いは受け付けない?」

金返せ? つむぎわね! 臨時収入が200万ほどあったから返すわ  
よ!」

園田の3レース2番から総流し、馬単でね、10万ずつよ!」  
聞いてんの!」

電話をするみずきさんの横顔を見つめている俺。  
身もだえするほど美しい。

いつたいどこへ電話をしているのだろうか?  
専門用語を駆使してしゃべるみずきさんの姿は  
キャリアウーマンそのものだ。

仕事も出来て、しかもやさしいみずきさんと  
俺は釣り合つのだろ? うか。

以前の俺ならそう心配していた。

しかし今は違つて、

俺は大作家への道を歩み始めたのだ！

貯金もなくなり今は一文なしだが  
今に俺は印税生活に入る！

しかし、あれから一向に連絡がないのはなぜだ？

それはともかく大作家になつたらみずきさんプロポーズしよう。

「俺はやつとみずきさん釣り合つ男になつたよー。まあ結婚しよう！」

すると彼女はほほをあからめ

「野口さん素敵！結婚しましょー！」

つて言つ。

く――――

妄想をしている俺の隣でなおも、みずきさんは電話をしている。

突然みずきさんは俺を潤んだ瞳で見つめる。  
突然のこと俺はうろたえる。

なおも見つめる、みずれの瞳。

でも澄んだみずせんの瞳は、夜空に浮かぶ星のようだ。

「ああ、適當な奴見つけたから受けた！その仕事。500万前払いの約束忘れるんじゃないわよ！！」

静かに電話を置くみずせさん。

するとなんと！俺の手を取つてこいつ言つではないか！――

「頼みたいことがあるの、私のこと好きだよね？」

「私と一緒に旅行に行つてほしの、、、」

旅行！――！

マジド、、、

「行きまつす！あなたとなりびへでも行きまつす！――」

「うれしい、、、好きになつちやうかも、、」

最近何でもうまくいつてしまつ自分が、怖い、、、  
大作家への第一歩を踏み出した次は、憧れのみずかさんと  
旅行に行けるなんて！――

最高の幸せに浸つてる俺。

すると背後から突然、悪魔のよつな声が部屋に響き渡つた。

「勇者よ、だまされはいけません！」これは全て幻です！」

### 3 全て幻！（後書き）

私もラゴスに殺意を覚えた一人です

#### 4 悪魔よ去れ！

振り向くと、そこには秘書課の朋美が立っていた。

やけに長い手足。異様に大きな瞳。

おまけに胸には十字架が下がっている。

ヽヽヽ 気味の悪いやつだ。

俺はこいつを見るといつも思つ。

「あなたはこの人間の皮をかぶつた悪魔に  
幻を見せられているのです、ヽヽヽ アーメン

小説のアクセス数も彼女の下僕のハッカーに  
書き換えさせたものヽヽヽ まやかしなのです。

今度の旅行もどうせ保険金殺人でも計画しているのでしょうか。」

「このクソ女、 、 、 でたらめばっか言いやがって！」

「でたらめを言つなー」この心の美しいみずきさんが  
そんなことできるわけないじゃないかーー！」

それを聞いたみずきさんはこいつ俺に笑いかける。

「あたりまえじゃない、 、 、 信じてくれるよな、 、 、 野口？」

「ええー信じますともーーーーー！」

みずきさんがそんなことするわけないーーーーー！」

可憐で清楚、 そして純真なみずきさん、 、 、

俺の太陽であるみずきさんを疑うなんて、 天地がひっくりかえっても  
ありえないーーーーー！」

「救いよつがありませんね、 、 、 仕方がない  
悪魔よーーこの十字架を受けてみよーーー！」

十字架を高々と頭の上にかざす朋美。

「悪魔よ去れ…」

するとなぜか突然みずきさんが苦しみ始めた。

「はははみずきさん、ノリがいいなあ…」の馬鹿に付きました」とありませんよ…」

さすがみずきさん。ギャグの才能も天下一品だ。

「ぐ、苦しい！何故だかわからないけど十字架を見るとほんとに苦しくなるのよね、くそ…おぼえてる…」

みずきさんは逃げるよつと去つて行った。

「大丈夫。悪魔は去りました。

あとはあなたの呪いを解いてあげましょ。」

神よ！哀れな子羊を救い給え！！」

朋美はそう言つと、魔法のつえのようなものを取り出し  
おもむろに俺の頭をガンガンと殴りはじめた。

「いて！何すんだよこの野郎！

お前こそ悪魔なんぢやないのか？」

俺は部屋を出て行きみずきさんを追いかけて行つた。

1人残された朋美は、十字架を握りしめ  
野口が去つて行つたドアを見つめる。

「かならず、かならずあなたを悪魔の手から  
取り戻して見せます。

私の命に掛けても、

勇者様、  
、  
、  
」

#### 4 悪魔よ去れー（後書き）

夜中やつてゐるやつて、アタマが離せません！

好きだから、 、 、

「何？2週間の有給休暇だと？君はこの前とつたばかりじゃないか？」  
駄目だ駄目だ！今の時期忙しいんだから

「わかりました、でも課長、夜の一人歩きは気をつけてくださいね、ひひひ」

みずきさんは今黙々と打ち合せ中だ。

2人とも真剣な顔をして何やら論議をしてる  
ビックプロジェクトでも立ち上げるのだろうか。

そして自分の席に戻つたみずきさんはまたまた俺の方を見て微笑む。

くーその笑顔を見るためだつたら俺はどんなんことでもしますーー

「あなた、私の頼みを聞いてくれる？」

「せう、 、 あたりまえよね！ それから私のことは  
ちゃんとじい主人さまって呼べって言つたでしょ！」

みずきさんはスタンガンを取り出し俺に押し当てる。  
いてて！ 痛かつたが、 俺が間違つた言葉つかいをしたんだから  
当然の報いだ。 みずきさんが怒るのも仕方がない。

「今度あなたと旅行に行くじゃない？ それであのくそ課長に  
有給休暇をくれって言つたら断られちゃって、 、 、

私は足の病気の療養に行きたかっただけなのに、 、 、

ひどいと思わない？」

なにい？ あの野郎、 、 、  
俺のみずき様になんて失礼な！

「だからあ、 、 、 あなた代わりに課長に頼んでくれる？  
おねがい」

「 もちろんです！俺はあなたにすべてをやらせて死ぬ覚悟はできています！」

命に代えても有給休暇はひとつできます……。」

意気込んで返事をする俺だが

また、あやしい声が今度はオフィスに響き渡る。

「 だまされではいけません！」

「 おーおー、 、 、 朋美かよ、 、 、 ほんとこいつは気味が悪いやつだ。」

「 それにしても勇者様、 、 、 あなたはどうしてそこまでこの悪魔に肩入れするのですか？」

「 この悪魔はどう見てもあなたを利用することしか考えてませんよ……。」

「 どうしてなんですか？」

俺は煙草に火をつけ、 遠い眼をして窓の外を見た、 、 、

「 みずきさんは、 、 、 かあさん、 、 、 俺の亡くなった母さんに面影が少し似ていてね、 、 、 、

そういうえばいつも怒られてばかりだったなあ  
母さんとの思い出は俺の宝物だよ、 、

はじめてみずきさんと出会って

俺にすごい得な話を勧めてくれて、 、 、 、  
北海道の土地を買つて話なんだけど

俺は金がなくつて断つたときにみずきさんに  
こう言われたんだ。

あなたはいつも田の前のチャンスを見送る人生でいいの?  
あなたには一步前に踏み出す勇氣がないのね!

俺はショックで動けなかつたよ、 、 、  
確かに俺の人生、チャンスを見逃してばっかりだつた、 、 、

そしてこんなに親身になつて怒つてくれたのは

俺の人生の中でかあやんとみずきさんだけだった、 、 、 、「

「要するにこいつはマザロンで怒られたいデマなのーー。」  
みずきが言つと、オフィスにいる全員が深くうなづく。

「 、 、 、 それって原野商法の勧誘だと思つんですけど、 、 、

まあそれは置いといで、 、 、

出たな！邪悪な悪魔め！—またまた十字架でお仕置きですよーー。」

朋美が十字架をかざす。

「なぜ？へ、苦しこーーーへーーおぼえてるーー。」

みずきさんはまた具合が悪くなつたみたいだ。

「へーーそれにしてもあの十字架を抱えた変態女め！  
みずきさんと俺の仲を邪魔しやがつて！

「おーー朋美ーーおつぱきまといのはやめてくれーー！

「なんだ君は！」  
「僕とみずきちゃんの仲を邪魔するんだー！」

その言葉を聞いて、朋美は下を向いて顔を赤らめる。

「勇者様、、、あなたをお守りしたかったから、、、  
す、、好きだから、、、」

「ふーん」

俺はまた仕事に戻る。  
それにも、具合の悪くなつたみずきちゃんが心配だ、、、

## 5 好きだから、 、 、 (後書き)

感想お待ちしています

## 6 空港でペンチ！

「ここは空港。

たくさんの人があつた返している。

せいたたずむ、野口とみあわ。

「みずあわそれにしてもよく休暇とれましたね！」

上機嫌でウキウキの野口。

そりやそうだ。あこがれのみずきと2人つきりで旅行なんだから。

「娘の裸の写真をネットにばらまくつたりイチコロだつたわ！  
結局ばらまいたんだナビ、」

「それにしても、ひつ聞いてもいいですか？  
俺たちこれからいつたいどこに行くんですか？

そろそろ教えてくれてもいいと思つんですけど？」

「別に知らないでもいいじゃない…どうせすぐ死ぬんだし、  
おっと！思わず本音が、  
、

え？なに？あなたは私と旅行に行きたいのよね？  
だったら私がいれば別に行先はどうでもいいんじゃないの？」

俺が間違っていた、  
、確かにみずきさんの言つ通りだ。  
別にみずきさんがいれば行先なんてどうでもいい。  
実につまらないことを気にしてしまった。

「じゃあ、私は飛行機に乗るからー！ちなみにファーストクラスだけ  
ど。

あなたは迎えが来るからここで待ってるのよー」

「え？一緒に乗るんじゃないんですか？」

あわてる野口の背後にあやしい男たちが迫つてくる。

2人は背後からいきなり腕をつかむと野口を外まで引きずつっていく。

人気のないところまで来るとハンカチを口に押し当てられる野口。  
気絶した野口を男たちは車のトランクに入れどこかへと走り去つてしまつた。

そのJAPAN酒では、

なんと空港のロビーを爆走するバイクが一台。

爆音を響かせ、オイルのにおいをロビー中にまき散らしながら、ぶつ飛ばしている。

ドライバーの胸にはきらりと光る十字架が一つ。

ヘルメットを投げ捨て、あらん限りの声で叫ぶ！

「勇者様――――――」

「くくく、、もう遅いわよ、魔法使い。」

一階のテラスから不敵に笑うみずき。

「あなたの勇者様は、今頃もう始末されてるかもねえ、、、  
さあ、私は金持になつたし、地中海でバカンスでも楽しんでくる  
わ――  
ははははは」

みずきを追つ朋美。

「逃がすか――」

階段を駆け上るとおもいつきり飛び上りみずきへとダイブする。

「ウルトラ十字架アタツ———ク！—」

「それがあのねえ」

顔に十字架を押し付けられたみずきは恐ろしい叫び声をあげながら  
氣絶してしまった。

その跡がすーと消えると、みずきは静かに田をあけいひ言った。

## 6 空港でペンギー（後書き）

先を奪えてませんーー！

## 7 田を覚ましなさい！

「私、 、 、 もしかしたらまた悪い」としてたのでしょうか？」

まつたく表情の変わったみずきはつるたえながら朋美に聞く。

「ええ、 、 、 死刑になるぐらーの」

「ああー恐ろしいー私時々自分がわからなくなるんです！  
きつと悪魔に取りつかれているのだわー！」

さめざめと泣くみずき。

それをやさしくなだめながら、 朋美は言へ。

「大丈夫ですよ、 、 、 悪魔はもう去りました。  
あなたはもう何も心配することはありません

慈愛に満ちた笑顔をみずきに向ける。

「ありがとー！ ありがとー、

、 、 、 て スキありー！」

いきなりみずきは持っていたカバンを朋美に投げつけダッシュした。

「あー汚いーまでー

みすきは搭乗口に駆け込む。そして閉められたゲート。

ゲートの中であかんべーをしてみすきを見て死ぬほど悔しがる朋美。

「あんた馬鹿じゃないの？ 悪魔に人が乗つ取られるなんて現実では絶対ないのよー。田を覚ましなさいーーー！」

ファンタジー小説読んで教会通つてたりしてるから頭がおかしくなったんじゃないの？

もしかしたら本当に魔法が使えると思ってるんじゃない？  
きもーーー。きやははははは

「うはーはー、今日は体の調子が悪いので魔法はナシです、ーーー、

それでも、  
それでも、  
それでも、

あなたを少しでも信じた私がバカでした！

あなたは仕方ないから見逃してあげる！

でも、  
でも、  
でも、勇者様の居所を教えなさい！

「じらなーい！今頃切り刻まれて海にでも浮かんでるんじゃないの？」

「じゃあねえ！」

みずきは笑いながら去つて行った。

取り残された朋美から、  
こぼれおちる涙が一粒、  
一粒、

「あなたに、もしものことがあつたら、  
私は生きてはいけません、  
どうぞ

「ひつむじ無事で、 、 、 勇者様」

通り過ぎる人ごみの中で

ひざまづき、 十字架を両手で握りしめる朋美。

朋美の必死の祈りは、 天に届くのだろうか、 、 、

そのころ、 野口は、 、 、

「あー殺し屋さんーそれ口――ン!

メンチングラードラー 倍満ね!

それにしても弱いなあ殺し屋さんは！  
こんな見え見えの手に振っちゃダメだよーーー！」

なぜか上機嫌で雀荘にいたのだった、、、

## 7 皿を覚めしむれーこー（後輪わ）

“ルルルルル、 、 、 」 ねから

## 8 危ないのはみやぎへ

「お前が、アカギ」ひしょりとて言い出すから  
いけないんだぞおー！」

「だつてこいつなんに強いとは思わなかつたんで、  
お前だつて吸血麻雀で一度人を殺したかつたんだよなあ！つて言つ  
てたくせに！」

困つた顔をした二人。

さつき野口を連れ去つた人たちのようだ。

「ふふふ、、、ゲーセンで鍛えた俺の腕を  
見くびつたようだな、、、それ口一ん！」

メンタンピンダラドラーー

またハネちゃつた！

のどかに三人打で楽しんでる野口。  
すると携帯が鳴る。

「もしもし、 、 、 、 何だ朋美か、 、 、  
え？ 今どこにいるかつて？ 雀荘だけど？

殺し屋？ ああ目の前にいるよ。

でも今は俺があいつらを殺しちゃってるけどね！

はははは！

ぶちっと携帯を切る野口。

「さあ！ 続きだ！」

すると突然ドアを蹴破るけたたましい音が雀荘に響き渡る。

入口に立つのは朋美。  
ただならぬ殺氣だ。

「大丈夫ですか！ ……勇者様！」

「大丈夫も何も、 、何の用？」「あは用ないんだけど」

そして朋美は殺し屋に向かつて叫ぶ。

「勇者様を返しなさい… さもないと容赦しないわよ…」

身構えた殺し屋が、 突然表情を崩す。  
なにがおかしいのだろう?  
なぜか殺し屋は笑い始めた。

「心配すんなよー」「つはダニーだから…」

殺し屋たちはなおも下品に笑う。

「ダニーへ…」

「おどりだよー」「くきみずきを始末するためのなー」

まったくあいつは金は返さない、平氣で人をだます  
まったく非道なやつだよ！

ついにはうちの事務所に火をつけるつて脅して来たから  
始末することにしたのさ！

この男を始末している間、地中海で  
ゆつくりアリバイでも作ってきてくれって言つたら  
簡単に引っかかったよ！ははははは

あいつは地中海クルーズの船の中で  
食いすぎで死ぬって設定になつてるんだ！

「、、まあ、勇者様を手に掛けようとした者には  
当然の報いですね、、、ちよつとかわいそうだけど、、、

でも、よかつた勇者様が無事で、  
さあ帰りましょ、、、ええ！！

勇者様？レインボーのオーラなんか出してどうしたんですかあ！..」

「貴様、ひ、許せん…みずからんを手に掛けよ! つかひやつせ  
いひつだ!…!」

ロ――――ン――!

大三元四暗刻! 48000オールだあ! !

お前らの負けだあ! !  
さあ金払え!

地中海への旅行費用をな!

「ぐれやあ! ま、負けた、  
でも、もう遅いぞ、勇者よ、  
今頃みやせよ、はははははははは!」

金をふんだくつた野口は  
すぐさま空港へ行き

そのまま機上の人になつた。

「ふう、 、 、 疲れた、 、 、  
みずきさん大丈夫だろ？

まあ簡単には死ぬような人じゃないと思つけど、 、 、 、

、 、 、 、 つて！ ！ なんでお前が隣にいるんだよ！ ！ ！」

飛行機に乗る野口の隣にはちゃつかり朋美が座つている。  
なんだか野口と2人きりになれて楽しそうだ。

「わーいー一人きりで旅行！ 楽しいなあ！  
どこまでもお供しまーす！ 勇者様！

さあ冒険の旅の始まりだ！  
なんちて、 、

ああー、はしゃいだらなんだか眠くなつてきました、  
勇者様、、、肩を貸していただいて眠つてもいいでしょうか、、、  
」

野口は無表情。

「これが、、、答えだ」

野口は肩に剣山を置いて自分はそのまま寝てしまつた。

「こじわる」

野口の寝顔を眺めながら  
朋美はつぶやいた。



## 8 危ないのはみずき？（後書き）

しかし小説の評価なんて、人によつて違うだろ？  
ましてや素人なんだし、、、

## 9 パーティー完成！

「どうでも青い空と美しい海。  
ギリシャ。」

ひょんなことから、ここにきてしまった、野口と朋美。

「ああ！いいところだねえ、ここは」  
大きく深呼吸をしながら野口が言つ。

「私たち、新婚旅行のカップルに見えるんじゃない  
ですか？もしかして、へへ、きやつ！」

顔を赤らめる朋美。

「見えんでいい、へへ、所で

適当に来てしまったのでこれからどうしたらいいんだつ、へへ、」

空港の前で途方に暮れる2人。

「ようこそギリシャへ！日本人ですか？  
それについてあなたは美しい奥さんを連れていますね！」

「ついやましーーー！」

その声に2人が振り返ると  
そこにはやたら体格のいいギリシャ人らしき男が立っていた。

「おお日本なつかしいですね！」

私、武道を習いに大阪に10年住んでました。

それにしても日本の地名、難しいですね！  
ニシナカジマミナミカタ？  
ノエウチンドライ？

何かの呪文ですか？これは？」

「あやしいなあ？何の用ですか？」  
朋美が尋ねる。

「おお！これは失礼しました。私はテオファニス。  
ギリシャ人のガイドです。ファニスって呼んでね！」

「ガイドかあ、俺たち遊びに来たんじゃないんだなあ  
みずきさんを助けにきたんだけど、」

「みずかへ。ねねー。みずかですか！」

最近日本人のすごい金持ちが来ましてねえ！  
私たち争奪戦になつたんですが、

確かその人の名前がみずきだつたような、、、」

「ええ！ みずきさんをしつてるんですか！ ど、どこに行つたんですか！ みずきさんは」

「確かに、そのまま船に乗つて地中海を回るつて話は聞きましたが、 、 、 」

「乗ります！！その船のりまつす！！  
どこに行けばいいんですか！！！」

空港前でワイワイ話している3人。

「はい！ その船は、 、 、 、 、

、 、 、 、 む、 、 殺氣！！」

鋭い眼光を放つたファロスは  
いきなり、後ろから襲いかかって来た男に

後ろ回し蹴りをローで叩き込む。

回し蹴りを食らった男は悶絶して転げまわる。  
おそらく右ひざの半月板は衝撃で砕け散つているであろう。

「フグトルネードだわ、 、 、 やるわね」

朋美が感心してつぶやく。

構えるファロスにもう一人の男が猛然と  
襲い掛かる。

見事なさばきで応戦するファロス。

バチバチと手が当たる音が空港前、 青い空の下に響き渡る。

続いて、ファロスの「うげき。

右のミドルキックを放つ。

ファロスは、キックが得意のようだ。

腕で脇腹を守る男。

しかし

ファロスの足はブロックされる瞬間、その場から忽然と消え  
次の瞬間には、男の頭を打ち抜いていた。

「田にもとまらぬ2段蹴り、・・・」の入空手の有段者だわ

感心してうなずく朋美の隣で

ファロスは滝のように流れる汗をふく。

「そしてこいつは、かなりの汗つかきだ！  
それにしてここまで奴らの手が伸びてるとは、・・・

ファロス！手を貸してくれ！お願いだ！」

バスタオルで拭いた汗を絞りながらファロスはうなずく。

「マフィアに狙われてるとは、、、よほどの事情があるのでしうりでしうり！力貸します！」

野口、そしてファロスを見た朋美は田をキラキラさせながら「ううう。

「テレレレレッテレ ！..! 拳法家が仲間に加わった！..!

勇者様！これでやつとパーティーが組めましたね！..! おめでとうござります！..!

「これで悪魔退治に出発できます！..! みずき！覚悟しり！..! 」

「退治するんじゃなくって助けに行くんだよ！..!

それにパーティーってなんだよ！オタクをギリシャまで輸出するんな！..! 」

勇者と魔法使い。そして拳法家が仲間に加わり  
冒険の旅の支度は整つたようだ。

彼らのギリシャでの命をかけた戦いが今始まる！！

## 9 パーティー完成！（後書き）

才能ねえ、 、 、 、

## 10 恐怖のトライナー

地中海を渡る豪華客船。

美しい海を渡る船の中は金持ちの詰め合わせ状態。  
そういうじゅうで、セレブ臭が立ち込めてこる。

その中でもひときわ皿立つ女がひとつ。

みずきだ。

今までとは違ひ優雅な立ち振る舞い。  
まるで本物のセレブのお嬢様のようだ。

「セレブ！セーレーブ！私はセレーブ！  
世界一のセレブなのよ！  
ちなみに私は王家の出なのよ！」

調子に乗つて適当なことを言つみやが。

「つめばつか、 、 、 本当は東淀川の団地で生まれたくせに、 、 、 」  
と、 お付きの者（本当は殺し屋）がつぶやく。

「なに？ なんか言った？」

「それよじめし、 、 、 、 じやなかつた、 、 、 ディナーはまだかしら？  
セレブの私にふさわしい豪華な奴を用意しなさい。」

「はい！ ただいま！」

「ふふふ。 」のディナーがお前の最後のディナー  
になるんだよ。」

お付きの者がわざわざテーブルに料理を並べる。

「「れはなに？」

「キャビアのバケツ盛りです。  
たくさん食べてくださいねー。」

「こんなに食べられるわけないじゃない！」

「え？ セレブの方は皆さんこれぐらことは食べますよ？ もしかして本当はセレブじやないんですか？」

セレブと云つて言葉に弱いみずか。

「 も、もちろん食べれるわよー私はセーレ、ブーですからー。  
金持ちだからキャビアもバケツでいっちゃんつよー。」

にやりと笑うお付きの者。

「セレブ様の！ ちょっといいとこ見てみたい！」  
それ！ 一氣！ 一氣！

はやし立てられたみずきはキャビアを一気食にする。  
何とか食べ終えたみずきの顔色がかなり悪い。

「前菜パート1終わりです。」

次は、 、 、 」

「ちょっと聞いてもいいかな?  
前菜なのこれは」

顔色を紫にしながらみずきが聞く。

「なんたってセレブですか！」

前菜はパート33までいつちゃいますよー！

それからメインは牛一頭丸焼を予定しますー。  
さすがセレブ！豪華ですねえ！」

「うー、 、 、 聞いただけで死にそう、 、 、 」

ふふふ、 、 、 予定どおりつ抜しこんでこるぜー。  
お付きのものは満足かい。

「さあ！前菜パート2！  
フォアグラのじきわい丼です！

ちなみに20000キロカロリーあります！  
セレブって感じだあ！ ！ ！」

椅子！」と後ろに、ぶつ倒れるみずき。

みずき暗殺計画ましまくいっていよいよひだ。

そのころ野口たち一行は、

「ちょっと、何で朋美とファロスがセレブに化けて  
俺はボーカなんだよ！納得いかん！」

「あなたの身から出ている貧乏オーラで  
どんないい服を着てもセレブに見えないんですよ

いつたいあなたは今までどんな暮らしをしてきたのですか？」

首を振りながらファロスが言つ。

「うねせーー、どうせうちのテーブルはミカン箱だよーー！  
俺がだめなら朋美はどうなんだよ！」

どんなにいい服を着っていてもあの変態にはあわな、、、、！

地中海の潮風に吹かれ真っ白なドレスを着た  
朋美は船のデッキを歩く。

ストレートの長い髪。  
胸にはもちろん十字架。

海を見つめる朋美の横顔に  
思わず見とれる野口。

「朋美さんはどこからどう見てもセレブですねえ！  
この船一番の美人ですよーー！」

あんな人、ギリシャにもなかなかいませんよー。」

「ううとうとした口調で言つフアロス。

「ふんー。」

野口はなぜかふてくされて横を向く。

「服なんかで俺は、、、騙されんぞーーー。」

10 恐怖のトライナー（後書き）

早く開幕しろーー！

「うーん、 、 、 」

いすからぶつ倒れて皿を回すみずき。

殺し屋たちはなおもみずきに食べさせようとする。

「おーーーもうひと押しだーはやく持つてーーー

さあセレブ様！食べてくださいー

おなががパーンとはじけるまで食べてくださいーーー

突然後ろのドアがバーンと開く。

そこにはなぜか決めポーズをとった3人が立つ。

「まてーーー悪人どもーみずきさんを放せー！」

「げーくされ野口じゅん、 、 、 何でこんなところに居るの？」

せつかくはるばる助けにきた野口を  
まるで汚物を見るような目つきで見るみずき。

「こいつらをかたずければいいんですか？任せてくださいー。」

構えるファロス。

ところが、次の瞬間あらうことか  
みずきがファロスに飛びつく。  
そしてキスの嵐をファロスに注いでいるではないか！

「きやー素敵な人！野口もたまには役に立つ！  
筋肉すてきー！」

「なんですか、この下品な女は  
美しい朋美さんとは正反対のひとだ、」

ファロスはかなり迷惑そう。

「げーーー！俺と言つ人がいながらーーー。  
ひ、ひどーーーいーーー！」

泣き崩れる野口。

「驕されているのがやつとわかつていただけたようですね！」

勇者様！

さあ私の胸でお泣きなさい」

「いぬせえー変態ーみずきさんはだましたりしないー！」

「勇者様！」

「みずきさんー！」

「オー朋美さんー！」

「ああファロスー！」

4人がぐるぐる回りながら追いかけっこをしている。  
世にも醜い風景。

「なんか、馬鹿らしくなつてきたな、 、 、 」

「だいたい、食いすぎに見せかけて殺すなんて  
めんどくさい」としないで、海にでも落とせばよかつたんだよな

「仕方ないだろー! 本部からの命令なんだから」

「帰ひうか、 、 、 」

殺し屋たちは呆れてその場を去つていいく。

もつれにもつれた人間関係。

はたして朋美の思いが届く日が来るのだろうか。  
それは誰にもわからない。



11 いじれた関係（後書き）

雨嫌い

「くそーあいつらー裏切りやがつてえー  
覚えてろー！絶対放火してやるー！事務所に放火してやるー！」

みずきは怒り心頭の様子。

すると突然背後から声がする。

「なぜ君に裏切り者呼ばわりされなきやならないのかね？」

4人が振り向くと、そこには小学校低学年ぐらいの子供が立っていた。

「、、、どこの子供でしょう？

きみ？どこから来たの？」

朋美がやさしく問いかける。

しかし、その子を見てみずきは急に震えだした。

「みずめ、君にはいづれ死んでおるが、  
覚悟したまえ、はははは

、わーい十字架のおねえちゃん！だっこしてえ  
その胸の中になむりたいの」

みずきに死の宣告をした後  
朋美には泣えるその子供。

「こいこい、」

朋美はその子を抱っこする。  
朋美の胸をまさぐる子供。  
そしてファロスと野口の方を向いて、邪氣のこもった笑いを  
浮かべる。

その顔には、いらやましこか？この野郎！  
と書いてあるようだ。

「ぬぬぬ…ゆるせん…、、、やじつやましーーー、」

ファロスは何とも言えないような顔をしている。

「 みずきさん。あの子何者なんですか？」

野口が素朴な質問をぶつけた。

「 あの子は、 、 、 梅木、 、 、 友達からひはづめひやんって呼ばれているらしいわ

どこにでもいる小学一年生とは表向きの顔。  
実は悪の帝王なの、 、 、

算数の時間はちょっと眠たくなつちやつ  
闇のフイクサーとは彼のことよ！――！」

「 みずきよ、それ以上私の話をするな、 、 、  
ちなみに飛び箱は3段跳べるようになつたぞ。

おまえは私の組織を裏切り、金をだまし取つとした！  
その行為は万死に値する！――！」

よつて、夜の廊下はちょっと怖い闇のフイクサー  
うめちゃんは君に死刑を宣告する。

ふはははははは

「ひいいい、助けてください！」

大みそかはわくわくして眠れない闇の帝王うめちゃん様！

何でもしますからあーーー！」

みずきは泣き叫んでお願ひをするが

うめちゃんはカリカリくんを食べながら  
行ってしまった。

ママの作ったオムライスおいしいね！が口癖の裏社会の皇帝うめちゃんを逆ぎつけてやるーーー

手伝ってくれるわね？野口」

「はい！何でもします！！

私の子分も手伝わせますので！！

子分ども！いいな！

これからあの闇の帝王をおしにいくぞ！」

朋美とファロスは気乗りしない様子だったが  
野口一人だけは勝手に盛り上がっている。

「この勇者が、魔王を倒して見せましょう！－」

## 12 魔王登場（後書き）

ふざけやがいへ  
ご意見お待ちしております

### 13 ちゅうじゅじゅ

異国の町並み。

その中をあるく朋美。

いつも田舎とは全くかけ離れた風景が  
野口の前に広がる。

そういえば朋美もいつもとは違つよつに見える。  
野口にはそう見えた。明らかに。

「外国旅行のこの開放感を味わつたら病みつきになるつて  
本当ですねえ。

だつて田の前に広がるのは

混じりつ氣なし、純度100パーセントの

非日常ですか、

田舎の自分が悩んでることと  
完全に切り離されるのは、ここにいる間だけですけれど。

「野口さん、旅つていいですね！」

朋美が野口に微笑みかける。

そういうえば、朋美が野口のことと勇者様と呼んでいない。

「ああ、そうだな」

「所で、、、私があなたのことを勇者様と呼ぶのは何故だかわかりますか？」

「ゲームおたくだからだろ？」

「違います、、、

あなたが、私を守ってくれる

世の中の苦しみすべてから救ってくれる  
私だけの勇者になつてほしいなつて考えたからです、 、 、 」

下を向いて赤い顔。

十字架を手でいじくり倒している。

「でも、 、 、 あなたはみずきさんが好き。

私のことは見てもくれない。

野口わん。

私は自分でもちょっと変わつてゐて直観はしています。  
でも、 、 私、 魅力ないでしょか！ ！

私今、 勇気を振り絞つて言つてゐんですよ！ 本当に！

どうですか！ 野口わん！

「 、 、 、 、 考えとく」

街並みを眺めながら野口は氣のない返事。

そしてちりつと朋美を見る。

隣には今、勇気を振り絞った

若い女性が赤い顔をしながら歩いている。

地中海を見下ろすこの街並みを歩く彼女。  
白い服に漆黒の長い髪。

まるで彼女はこの美しい風景の一部のよつだ。

そして、、、

彼女がいなければ、本当にこの街並みは  
美しいと感じられるのだろうか。

彼女がいるからこそ

この街並みは美しいと感じたんじゃないのか？

「やあ、、、先行きますねー。」

「やあ、、、先行きますねー。」

走り出す彼女。

「ちよつと待つてー。」

振り向く朋美。  
やけに印象的な色白の顔。

野口はうつむき加減、少し口をとがらす。

「やあ、、、もう少し一緒に歩かないか?」

「やあ、、、うん」

そして2人は再び歩き出した。  
非日常の風景の中を。

2人はいつの間にか手をつないでいた。

13 あればじよつとめじめ（後書き）

あれ

日本に帰つてきたら桜が咲いていた。

春になつてた。

帰る飛行機の中で悪の帝王がずっとみずきの隣で

「殺す！絶対殺す！裏切り者は絶対殺す！」  
と言い続けていたためだろうか。

みずきの顔色が土色だ。

朋美は朋美で何を勘違いしたのか  
俺からぴつたりとくつついて離れない。

旅先で俺は血迷つていたのだろう。

日本に帰つて見てみると、朋美はやつぱり変態のままだった。

「私、 、 、 家に帰る、 、 、 疲れた、 、 、 」

生氣のなご声でみずやが言ひへ。

「みずやよ、帰つたひの悪の帝王に  
ハンバーグを作るのだ。

付け合わせのこんじんは煙らんぞ。  
悪の帝王はこんじんは食べられないのだ。

「ふさわせませせ」

「わかつたわよ、それよりも  
宿題ちやんとやつなせこむーー

「みゆけやんーじやなかつた悪の帝王様ーー

？？？

なんだ」の違和感は、、、

なんだかまるで、、、

「ふはははー

この私は人間界を支配するために  
このバカ女の体内より生まれ出たのだー！」

「馬鹿とは向よー後でお尻べんべん決定ー！」

、、、え？

もしかしてうめちゃんって

「私の子供。私シングルマザーなの。」

ええ？？

「み、みずきさんの子供、、、

みずきさんって、、、処女じゃなかつたんだああーーーー！」

「こんな、汚れた処女がいるわけないじゃないですか、、、

勇者様の眼はやつぱり節穴ですね、 、 、 「

朋美は呆れた顔で野口に言ひへ。

「 そ う い わ れ れ ば 似 て ま す ね え  
悪 な 所 も そ つ く り で す 。

み づ き さ ん ！

あ な た も 人 の 親 な ら 、 子 供 の 手 本 に な ら な け れ ば い け ま せ ん 。

こ れ に 憲 り て 悪 い こ と は も う や め て 、 、 、 「

「 う ん で こ や こ ！

悪 は 止 め ら れ な イ の よ ！

え ー ー ー 空 港 の 壁 に ガ ム つ け ち ゃ え ！

「 つ け ち ゃ え ！

そ う 言 う と 、 み づ き と う め ち ゃ ん は  
ガ ム を 壁 に な す り つ け て 走 つ て 逃 げ て 行 つ た 。

そう考えながら俺はくつついて離れない朋美と

うーん！大変だ！

みづきさんとあれとの中にまた新たな障害が立ちはだかる。

俺はうめちゃんに好かれるだろうか。

それに、俺はうめちゃんをちゃんと育てることができるだろうか、

俺は一人悩んでいた。

大丈夫だろうか。

、  
、  
、

腕を組みながら空港を後にしたのだった。

## 14 いぬぢやとむやか (後編)

ギフトアップはせんぞー！  
書き続ける！

## 15 邪魔ばつか、 、 、

今日もみずきは野口を潤んだ瞳で見つめ  
またお願いモード。

今田はワンドセルをしようとしためちゃんまでいる。

「赤ちゃんだつたうめちゃんを抱えて  
あの頃私は途方に暮れていた。

仕事もせず、すぐ暴力をふるうあの馬鹿とは  
いつから縁を切つてやつた、 、 、

泣きじやぐる、まだおむつもとれないうめちゃんを  
見て私は思つた。

この子は私が一人で育てる。

たとえどんなことをしても。

それから私は必死に働いた。

でも世間の風はシングルマザーには冷たいものだった。

子育てに理解のない会社や  
世間の冷たい目、、、

それに屈した私が悪の道へと  
転がり落ちていったのは仕方のないことだった、、、

野口さん、、、

あなたをだましたのは悪気があつてのことじやない、、、  
必死だったの、、、うめちゃんを育てるのに、、、

分かってくれるわよね。」

みずきは野口に懇願するまなざし。

「そんな話誰が信じるものですか！だいたいそんな困っている人が  
なんで地中海で豪遊してるんですか！

ねえ野口さん？、 、 、 、

、 、 、 、 ええ！

なんで野口さん号泣してんですか！—

朋美が驚いていた瞬で野口は号泣していった。

西田からあふれる涙。

あふれ出る泉のように野口の眼から  
大粒の涙は絶えないとなくぽれおちていた。

「く、苦労したんですね、みゅせさん

これ、 、 、 持つて行つてください！

みずきさん勧められた北海道の土地を買おうと思つて貯めていた100万です！

「これであなたの痛みが癒されるのなら、僕はうれしいです」

「え？ いの？ セットー

「あめちゃんー！ 今田のいじ飯は焼き肉よーーー！」

「みずきよ、ほめてとひめー！」

ふははは

「金がなくなつたらまたこいつにでもう一回いくつーーー！」

金をふんだくつてみずきといひやんせ

走り去つて行つた。

「勇者様？ いいんですか？」

まだまし取られちゃつたんですよーー。」

あわてる朋美を野口はやさしく制す。

「僕は、騙されてなんかいないよ。  
だって、最初の言葉。あれはみづきさんの本心だ。

これは間違いない。僕にはわかる。

それに、、、

俺一文なしだし、、、

あの金、上の一枚だけ本物で  
あとは新聞紙なんだ、、、」

はははっはー！

2人は笑いだした。

「あと、」

「あと、何ですか？勇者様」

「！」の前の話

俺がお前だけの勇者になるつて話

考えてやつてもいいぞ

「ええ！ほんとこ！」

朋美は野口に飛びついてキスをする。

野口はこの時初めて朋美の体に手をまわした。

と、その時2人に迫る巨大な黒い影。

「ちょっとまたあ！」

はるか頭上から落ちて来る、切れ味鋭いかかと。

「かかと落としか！」

そななもの俺には通用せん！

俺のひみつ道具、ヘルメット君で防いでくれるわ！－

もちろん被るのが間に合わず  
野口の頭に突き刺さる巨大なかかと。

「朋美！会いたかったです！

あなたに会いに日本までやってきました！－

すーきーでーすー！－

のびてている野口を踏みつけて朋美に迫る男。  
もちろんファロスだった。

朋美に迫るファロス。

ところがファロスにも邪悪な影が迫りくる！

「パパよ！あなたの未来のパパよ！

すーキー！…ファロス！」

「パパー！」

みずきが戻ってきて  
まためちゃくちゃなことになる。

朋美は口を尖らせちょっと不満な顔。  
ふてくされながらぶつぶつ何か言つていてる。

「もう、、、何で邪魔ばつか入るの！  
いいところだつたのに！」

前途は明るくない朋美の恋。

よかつたら応援してやってください。



15 邪魔ばっか、ヽヽ（後書き）

変な感じ。

## 2・1 どきどきの同居人！

竜の冒険 第二百一回

久しぶりにパソコンの前に座り  
俺は文章を書く。

「やあ、ぼくはラゴス！  
こんな卑怯なところに隠れて物語を  
1か月も止めた張本人さ！」

でも僕には悪気は、 、 あべし！

ラゴスは一瞬で異空間へと消されてしまった。  
世紀の大悪人は当然の報いを受けた。

ふう、ゝゝ、また名文を書いてしまつた。

充足感に包まれた俺は煙草に火をつける。

「なんですかこれは？」

突然背後に巨大な影

「これはもしかして小説のつもりですか？」

私がサイトの管理人なら即削除して  
サイトを荒らした罪で告訴しますねえ、ゝゝ

ちなみにアクセス数は、ゝゝ、ひやーはつはつはは！  
トータルでひ、ゝゝ、1人！！

201回も投稿して1人つて、  
逆に難しいですよ！

いつたいどこのバカが読んだんでしょうねえーー！」

「、、、つてうるさい！

なんでお前が俺の部屋にいるんだよ！ ファロス！ ！」

俺の後ろにはなぜかカップラーメンをすすつて  
座るファロスがいる。

「適当に日本に来たんで住むところがないんですよーー！  
ここにいてもいいでしょ？」

「ほら！ 一人暮らしの部屋に突然同居人が来るのは  
ラブコメの基本ですからー！」

「あほが！ 一人暮らしの男の家に突然現れる同居人は、絶対美少女  
に決まつてんだよ！  
マツチヨな外人が来たら氣色悪いわいーー！」

「その筋の人向けのラブコメってことで、  
許してください」

、、、1人暮らしの俺の部屋に突然現れた  
同居人に俺の生活はかき回されそうだ。

もし、風呂ではち合わせたり

その同居人に淡い恋心を抱いたり

同居人の結婚式に乗り込んで「ちょっと待ったあ！」とか言う展開  
になつたらどうしよう、、、

俺の隣には胸毛をくしで手入れしているファロスが相変わらず座つ  
ている。

俺は頭をかかえてしまった。



## 2-1 ときどきの同居人！（後書き）

ギャグのセンスをください、、、

## 2・2 H口?

「ねえ、 、 、 勇者様？」

朋美は野口をじっと見つめて尋ねる。

「なぜ魔法やドラゴンは現実では存在しないのでしょうか  
魔法が使えたり、 ドラゴンを倒す冒険の旅  
に行けたらどんなに楽しいだらうって思いませんか？」

野口は食べていたテリヤキチキンを横に置く。

「朋美、 それは夢だからいいんだよ。  
できないこと、 あり得ないことを心に思い描くから  
楽しいんであって

本当にできてしまったら、 とたんにそれはつまらない  
ものになるんだ。

考えてみろよ。

昔の人からしたら俺たちは、魔法のよつたな世界に住んでるんだぜ？

でもそれは俺たちにしたら  
ごく当たり前のことでしかない。

そんなもんや

その言葉を聞くとこりとこりとした朋美は  
胸に下がった十字架を握りしめて目を閉じる。

「魔法は使えないし、ドラゴンにも使えないけど  
勇者様はここにいるわ、、、

私の勇者様、、、あなたの胸の中で跳ねたださこ

汚く狭い野口の部屋で、  
お互の距離は狭まって行く。

互いの顔を見つめる2人。

野口の右手が朋美のすらりとした腰に巻きついていくと  
静かに唇を、・・・・・

「俺のパソコンで何してんだ朋美？」

「な、なんにもしてませんよー。」

野口に右手をひねられた朋美は必死でパソコンの画面を隠す。

「ん？そして野口は静かにファスナーを下ろし  
ブラのホックを、、、??????

勝手に俺をネタにエロ小説書くな！――

しかも俺のパソコンで！――

野口はあらうことが女の子にグーで殴りかかる。

ヒロが画面のある項目を見て凍りつく野口。

「、、、え、、

らぶエッチ部門 1位

床にぶつ倒れる野口。

両目から大粒の涙がこぼれおちる。

「な、なんで朋美の書いた小説が10000000アクセスで俺のが1なんだ！わーーん！」

「それは朋美さんの小説が野口の100万倍面白いってことだよ」

ファロスがどどめの言葉を野口に突き刺す。

「確かに、 、 、 勇者様の小説は、 1行読むのにも苦労しますからねえ、 、 、

ねつと、そんなことなことですねーー。」

その言葉を聞くと野口は部屋の隅に行き足を抱えて座り、プチプチをやり始めた。

モノクロの世界が野口の周りにだけ広がっていく。

何事かをつぶやく野口。

「みんな、、、わかつてない、、、わかつてない、、、」

なにしてんだろう?俺

## 2・3 道場へ行く

「駅前のビルの2階ですか。」

1階にコスプレの店があるからすぐわかると思います。  
3階はセクキャバなので、間違った振りして行かないでくださいよ  
！」

野口と朋美はそんな怪しげな雑居ビルを探して街を歩いている。

2人はファロスの通う道場に招待を受けたのだ。

2人はコスプレの店があるビルを見つけたがそのビルには空手道場の看板がかかっていない。

仕方がないので、その店の店員に聞いてみる。

「すこせん店員さん。」のビルの「階は  
階は道場でしょうか?」

「、、、、、」

店員はその言葉に全くの無反応。

「うううと、聞こえてる感じ。  
「階は道場ですよね!」

「、、、、、」

何故だかわからないが  
頭に赤い髪飾りをつけたその店員は  
野口の言葉に全くの無反応だ。

イライラする野口を朋美は制していつにまく。

「ここは私に任せてくれ」「  
アスカさんですか？」

「はい！なんですか！」

勢いよく返事をする店員。

「アスカ、のつもりか？  
ファンが見たら殺されるぞ、」

店員は野口をジロリと見つめていた。

「あんたバカア？」

「 てめ――――――――――――――

馬鹿はお前だ――――――

絞め殺してくれる――――

アスカ風の店員に朋美は道場が一階にあることを  
教えてもらい、怒り倒している野口をひっぱつて  
二階までいく。

「 ほんにちわー、あのう、ファロスさんいますか?」

朋美は遠慮がちにドアを開けにいった。

道場の中は様々なウホートトレーニングの機械が並び  
音楽が大音量でかかる中、じつに男たちが汗を流している。

道場と言つより、ボクシングジムのような雰囲気の中  
朋美の言葉に、中にいた『うつつい男たち全員が反応する。

「おおおーファロス！すごい美人がお前を訪ねて來たぞ！  
おい！どういう関係だ！」

わらわらと集まつてくる『つい男たち。

朋美の周りに集まりワイワイと騒いでいる。  
野口は弾き飛ばされ、一人蚊帳の外。

「君たち！私の将来のワイフなんだから  
手荒に扱わないでくれよ！」

滝のように流れる汗を拭きながらファロスが現れた。  
隆起した筋肉からは、熱気と湯気が上がっている。

そして、私の強くてかっこいいと見て

「おバカさんより私の方がいいと、早く気がついてくださいーー」

朋美は下を向いてかぶりを振る。

「ごめんなさい、、、ファロスさん。私にとつての勇者様は一人だけなの。

野口さん

朋美は野口に抱きつこうとするが

おぬで鬪牛士のよつてひらりとかわす野口。

「やめろ！ 下のアスカもどきなんかと心が通じる変態は嫌なんだよ！」

お前なんか、いつしめてやるわー。」

あらうことか、野口は倒れた朋美にキックをガシガシと入れる。

「へへへー思い知ったか！、、、？？？」

野口は突然男たちに両腕をがしつとつかまれる。

押しピンで止められた虫のようにまったく動けない野口。

野口は道場中の人間から殺氣を受けていた。

何十人ものマツチヨな大男からにらまれた野口は身ぶるいをする。

バーン！ガチャ！

道場のドアが閉められカギがかけられた、、、

「きさま、、、あらうことかこの美女からの愛情を受けず  
なおかつ暴力をふるうとは、、、

殺す！絶対殺す！

取り囲まれた野口は半泣き状態。

この後野口がどうなったかは  
言つまでもないだらう、  
、  
、  
、

2 - 3 道場へ行く（後書き）

ばかばかしくて「めんなさい、

## 2・4 狹いんだよー！

「勇者さまー今日はいいもの持つてきたんですよー。」

部屋でファロスとくつろいでいると  
いきなりドアが開いて、朋美が入って来た。

「ウイーですよウイー！

面白いですよー！

朋美は大きな箱を野口の前に差し出す。

「ウイー？なんだそれ？  
スタン ハンセンか？」

「そんな私が生まれたころに全盛期を  
迎えたレスターなんか知りませんよお  
そんなボケしても誰も付いてきてないですよー。」

そんな、 、 、

ブレー キが壊れたダンプカーって言われてて  
現 PWF 会長のハンセンなんて、 、 、 、 、

「朋美、 、 、 むちやくちや詳しいじやないか、 、 、 、 、 」

とにかく、 朋美は持つてきただゲームをテレビにつないで  
電源を入れる。

「最初はこのソフトで練習してくください！」

朋美が差し出したソフトには「初めてのウイー

と書いてある。

「早速やつてみよう! ファロス! 勝負だ!」

「いいですよー!」のリモコンを振り回すんですか  
なるほど、・・・、ふん! !」

野口はファロスが振り回したリモコンに  
吹っ飛ばされて壁に激突した。

「気をつけてください! ファロスさん!  
ウイーのリモコンでたくさんの人のがけがをして  
社会問題にもなったんですから」

「そ、それより救急車を、  
誰か、頭のリモコンを抜いてくれ、  
」

氣を取り直してゲームを始めよ!つとすると  
また勢いよくバタンとあくドア。

「ウイーウイウイウイーいいなあ!!

やっせよー野口ー!

てこつかくれーそのゲームー!」

「くれー!」

アの回りかこせよやせといひのやんが立つてこる。

ズカズカと部屋に入つてくると

野口の横に座りまた懇願する田つ木で野口を見る。

「あれ以来、、悪の組織が壊滅しちゃって、、、

手下は逃げちゃうし、、、、借金は払えずで、、、、  
とつとうアパートも追い出されちゃつた、、、、

うめひやんと手を取り

あてもなくせまよつ私たちが

唯一頼れるのはあなただけだった、、、、

お願い、、、、

私とうめひやんを「ここに置いてくれない?」

野口立ち上がりて飛び上る。

狂喜乱舞する野口。

「きたーーー！やつと来たーーー！」

ラブコメ的展開！！

と、、言つわけで、朋美とファロスは  
いまから3秒以内に出て行つてくれ！！

あ！ ウィーは置いてけよ！

朋美がすくつと立ち上がる。

そして、あらん限りの憎悪を  
みすきに向ける。

「私の勇者様と一緒に暮らすなんて  
私がゆるしません！」

悪魔よ、 、 、 久々に出てきたなー！

またまたまたー！ 十字架でお仕置きですーーー！」

といひが、 みずきといひむちやんは  
なんともないようだ。

「ぱーかーかー！ 目をつむれば十字架なんて怖くないよ だーーー！」

ぱーかーかー！」

「なんてこと、 、 、 十字架が効かないなんて、 、 、

仕方ありません、、、

私も「」へ泊つて、「」の悪魔どもが  
悪いことをしないよう見張つていましょ  
う

、、、、、きやー勇者様一緒に寝ましょうねー

「私も行くところないのでこここまーすー！」

ワイワイ騒ぐみんな。

しかし野口は何か言いたそう。

「あのなあ！4人と子供1人で  
このワンルームで暮らせるわけないだろ！

狭いんだよーー！」

「5人だけではないぞーー馬鹿野口よーー！」

やつこいつめちゃんはなんと犬を取り出す。

「//／＼チュアダックスのテーモンだ！」

「さやあかわいいーーだつ！」わせてーー！」

朋美が犬を見て喜ぶ。

「よーぞーー朋美よーー

しかし貴様はまるで犬を3匹抱いているみたいだなーーぐふふふ」

野口のワンルームで5人と一匹が暮らすことになってしまった。

これで野口に平穏な暮らしは  
一切なくなってしまったようだ。

2-4 狹いんだよーー（後書き）

風邪かな？

## 2 - 5 最多記録！！

今日も天使と悪魔は戦いを繰り広げている。

俺の部屋で。

その横ではファロスがトレーニングをし  
うめちゃんがリモコンを振り回している。

俺の部屋でえ…………

「聞いてください野口！」

1人暮らしの冴えない男の家に突然現れる  
同居人の人数がラブコメ史上最多を記録したらしいですよー。

今度ギネスに申請しようとおもすねー。」

「同居人が5人も現れたらもはやラブコメじゃねえ！！」

ファロスが言うたわ」とをツツコミながら俺は一つの思いが頭の中を駆け回っていた。

この状況は異常だ、 、 、 という思いが。

「でも、野口、

あなたとはしばらくお別れしなければなりません、

実はひょこひに行つてこようと思いまして、、、、」

ファロスは深刻な顔をして呟つ。

「ええ！あのオクタゴンで繰り広げられる  
究極格闘技に参戦するのか！

よし！行つて殺されてこい！」

「え？日本の銀行はそんなに危険なんですか？  
こわいですねえ」

「ヽヽヽヽヽヽヽヽ　つてそれUFOーー！」

極度につまらないボケをかわしつつ俺は対策を練る。  
とにかくこの状況を何とか打開しなければいけない。

ワンルームに5人と一匹。  
プライベートなんてあつたもんじやない。

そうだ！みんなにこの状況がいかに異常かを説明すれば分かってもらえるかもしれない！

みんな大人なんだから話せばわかるはずだ。

「みんな！聞いてくれ！」

俺は大声を張り上げると一斉に振り向くみんな。

「みんな！」この状況は異常だとは思わないか？

狭い部屋に5人がひしめきあい暮らしているんだ！

これだけでも異常なのに  
しかも男と女どうしが一つ屋根の下にいる！

「これはまあいんじやないのか！」

「ここはお互い大人なんだしここから出て行って、自分の暮らしをするのが筋といつもんじやないか！」

皆俺の言葉に黙つてうなずいている。

まあ俺のスピーチ力を持つてすればたやすことだが、

「ああ！みんな出て行って自分の力で生きていくんだーー！」

俺の言葉にうなずいたみんなはみんないつせいに返事をする。

「いやーーー！」

「だつて楽しいんだもーんーーー！」

みんなはさう言つとい、また戦いを繰り広げ  
リモコンを振り回す、、

俺の部屋で、、、俺の部屋でえええ！！

俺はたぶん呪われている。

悪魔よ、

俺の過酷な運命をプロデュースする悪魔よ。

こんな回りくどい苦しめ方をするぐらになら  
いつそひとり思ひにやつてくれ、、、

俺はこの部屋で繰り広げられている悲劇的光景を見ながらそう思った。

2-5 ■ 最多記録---(後書き)

、 、 、

## 2・6 貴重な朝の時間

朝7時にひめりちゃんを起し、  
顔を洗わせ簡単な朝食を作る。

せじて、ひめりちゃんと食事をとつ  
自分の支度に入る。

「あの悪魔もひめりちゃんの世話をだけは  
ちやんとやるようですね、、、ホッとしました。」

もじのひめりちゃんが悲しそうに泣いてたら  
私、本気で嫌いになるといたしました、、、」

朋美は微笑みながらみずきといひめりちゃんの様子を見守る。

みずきは食器を洗いながら、誰に話すのでもなく呟いている。

「うめちゃんが体調が悪くないか、いつも楽しく学校に行ってるかそして、ママのことが好きなのか、」

毎朝働いている私が確かめられるのはこの朝の一時間しかないのよ。

だから、朝はうめちゃんの顔をしつかり見て食事も一緒にとつて、出来るだけ話しかけてあげる。

そして、うめちゃんのことが好きだと精一杯伝える。

朝はいつもこんな感じかな、」

時間は8時。登校時間になる。

「では、行つてくるぞ！

野口よー！ ポケモンのことは頼んだぞーー！」

「ああ、仕方無い、、、面倒見でやるよ

野口が笑つてうなづく。

ミニチュアダックスのポケモンもワンと吠えてうめきやんを送り出す。

「よし私も行つてくるわよ！

今日もがんばってネズミ講の会員を勧誘するぞーー！」

気合を入れてみずきママも出勤していく。

「、、、また犯罪ですよそれ、、、

朋美はあきれ顔。

みずきがドアを出ようとすると  
すみじと彼女に迫る黒い影が一つ。

派手なスーツを着て  
ニヤニヤ笑うその顔は

爬虫類を思わせるような顔つき。

その男はドアを出て歩きだすみずきの背後から  
声を浴びせかける。

「よお、 、 、 久し振り、 、 、  
探したぜ、 、 、 またかこんな所でホームドアにいるじゃ  
なあ

みずき

その言葉にふり返るみずきは、一瞬驚きの表情を見せたが、すぐその男をにらみ返し、言葉を返す。

「梅木、 、今せり何の用なの？」

「くくく、 、その男は笑いだし、みずきに言葉を発する。

「くくく、 、変わつてないなあ、強い！  
強い女つてところは変わつてないようだなあ」

朝のさわやかな光の中、その梅木と呼ばれた男の笑い声が響き続ける。  
みずきはその男を見つめたままずつと黙つたままだった。

## 2・6 貴重な朝の時間（後書き）

子どもの虐待は無くならなものでしょうか、  
、  
、  
、

## 2・7 笑われにきたーー！

「今やうの何の用なのよー。」

みづきの叫びが野口のマンションにこだまする。

その憎悪のこもつた悲痛な叫び声は  
平和な朝を切り裂き

混沌とさせること、十分な迫力があった。

不安に駆られ、野口は玄関へと走る。

「どうしたんですか？みづきさん」

玄関へと出てきた野口を見る梅木のいやらしこ眼。

「ほほう、ヽヽヽ、こいつが新しい相手かい？  
へえ、おまえが選ぶ男にしてはまじめそうじやないか

おい！おまえ！こんな奴と付き合つてると  
取つて食われちまうぞ！」

へへへ！

またも梅木は笑う。

「おーどりしたんですかみずきさん！」

ファロスも続いて玄関へと現れる。

またまた梅木のいやらしい眼が破裂する。

「おいおい、ヽヽヽ、みずきやるねえ、ヽヽ  
2人も相手してるのかい？しかもマツチヨな外人とは、ヽヽ

さすがみずき、 、 俺の愛した女だけのことだけのことはある」

「みずきさん！ 大丈夫ですか？」

朋美も玄関に現れた。

「すげえな、 、 みずき、 、 、  
3人とは恐れ入つたぜ！」

しかも女を相手にすると、 、  
両刀とは知らなかつたぜ」

わんわん！

デーモンまで玄関にくる。

「おーーうーー！」

犬とまで付き合つとは！

おまえのアレはブラックホールか？

お前の無尽蔵のスタミナに乾杯！」

- - - - -

「この人一体何を言つてゐんですか?」

朋美は不安に駆られてみずきに聞く。

「こいつは梅木。お察しの通り  
私の前の旦那なの、、、

「それで、どうせ、

みずきは顔を覆つて叫ぶ！

「馬鹿なのー。しかも底なしのー。」

よくよく見ればズボンは後ろ前に履いてるし  
ネクタイの代わりに昆布を首に巻いてるあたりまだ。

「すげえ、すげえぜみずきー。」

梅木はそういうながら、  
どこかで拾つて来たのだろう。  
桜の花びらをまき散らしながら  
踊り狂つてゐる。

「でも安心して、、、、こいつを追いつのま  
す」  
「簡単、、、、」

梅木！

1たす1は！  
関ヶ原の戦いは何年に起つた？

うゞ、

奇妙な叫び声をあげ、梅木の動きは止まつた。

皿を白黒させ、舌を出して呑じてこる。

「1たす1は、

みずきよお、

俺に難しい問題を出すんじやねえつて

前から言つてゐるじやねえか、

えーん！

わからなーいよー。

もうおつかれさまでー。

梅木は泣きながら逃げて行つた。

取り残された4人に

とてつもない疲労感が漂つてゐる。

「なんなんだ？ いつたい、 、 、 、  
何がしたかったんだ、 、 、 、 あいつ

野口は魂が抜かれたよつた声でつぶやく。

「、、、、笑われに来たんじゃないですか？」

朋美がそう言つと、一同納得の表情。

皆は朝の支度の続きをするために  
また部屋に戻つていった。

2-7 笑われにきたーー（後書き）

2000本はきっと明日達成するでしょう

桜咲くこの春。

花吹雪舞い散る下、十字架を握りしめ  
そつと目を閉じる乙女。

乙女は願う。愛しい人が振り向いてくれることを、  
、  
、  
、

「呼んだあ？ ああああ

乙女の足元では愛しい人が真っ赤になつて酒に呑まれている。  
上半身裸で背中に「あほ」と書かれたその愛しい人は

自分のパンツの中にビールを注ぎながら  
朋美に襲い掛かってくる。

「いやあ！今の勇者様は嫌いです！」

今日はみんなでお花見だ。

みずき一家とファロス。

そして野口と朋美は公園ではた迷惑な宴会を繰り広げていた。

「朋美さんを襲うとは……ゆるせーん……！」

酒を飲んで手加減を忘れたファロスのキックが  
野口のテンプルに入る。

糸の切れたマリオネットのように崩れおちる野口。

氣絶した野口に容赦なくまた落書きをするつめちゃん。  
もう宴会は警察の取り締まりを受けてしまいそうな勢いで盛り上がり  
つている。

酒の飲めない朋美は一人おいてけぼり、・・

朋美は一人離れて公園を歩きはじめた。

公園では至る所で宴会が繰り広げられている。  
その上で咲き誇る桜に朋美は話しかける、、、

桜さんはこんなにきれいに咲いてくれているのに  
みんなは騒いでみようともしない、、、

せめて私だけでも見ていてあげる、、、

池のほとりにあるベンチに座り朋美は一人桜を眺める。

すると

きれいな桜に見とれている朋美の背後から  
聞きなれた声がした。

「うう、あこへる？」

野口は朋美の隣に座ると桜と一緒に眺めはじめた。

「俺は気が付いていたよ。桜が咲き乱れている」と。  
そして君が、美しいことにもとづくに気が付いていた。

君への気持ちが素直になれた俺は今、朋美とキスがしたい

「今日は駄目、今日はあなた危険だから、」

「なぜだい？なぜ俺が危険だとわかるんだい？」

「だつて、」

背中にきかん……あほ注意……つて書いてあるからです……

ちゃんと酔いを醒まして服を着てください……  
酔っぱらいは嫌いです……」

咲き誇る桜を見上げながら朋美は思つ。

もう、、、飲みすぎです勇者様、、、

でも、さつきの言葉  
うれしかつた、、、



ね！達成したでしょ！！

## 2・9 リターンマッチ

5人で食卓を囲む夕食。

田の前ですき焼きを囲む5人。

貧乏な5人には珍しく豪華な食事だ。

「そおっれでねえーー！リーチが来た瞬間に  
魚群が来てねえ！

暴走したかと思つたら

ポラリスが回つてチュンサンとキスをしたのよねえーー！」

、 、 、 、

とにかく、みずきがパチンコで勝つてきたよ！  
みずきが奮発して肉を買ってきていたので

今日はすき焼きパーティーとなつた。

そんな平和で幸福な夕食の最中

ドアを乱暴にガンガンたたく音。

野口がドアを開けるとそこには  
明らかに招かれざる客が一人。

「へへへ、、みずきよお  
豪勢なもん食つてるじゃねえかあ、、

俺にも一口食わせりよお、、

玄関から入ると勝手にテーブルに着く。

明らかに嫌悪感を表すみずき  
もちろん叫ぶ！

「なんであんたなんかどじはん食べなきやならないのよーーー！  
知能指数が一〇を超えてからこりつしゃーーー！」

さあー。わからなかつたら出て行きなさいーー。」「ところであんた！ 1たす1は！

↑↑↑

余裕の笑みを浮かべる梅木。  
梅木はひとしきり皆を眺めながら

おひるごはん

「へへへ、この前の俺とは  
わけが違つんだよー」

俺にはつよい味方がいるんだよお！

旦那！助つ人の旦那！

カクツヒニヤツヒダレニ

「ふふふ、、、答えは、、、2だ！…」

なんとうめちやんがママを裏切つて  
梅木の答えを言う。

ふははは！ へへへへ！

2人の高笑いが部屋に響き渡る。

「ところで梅木、、、誕生日にウイーのソフトの約束  
忘れるでないぞ！」

「もちろんですよ、旦那！ へへへへ」

愛する者に裏切られ、傷ついたみずき。  
怒りにまかせて吠える！吠えまくる…

「！」の外道！うめちやんをだまして  
裏切らせるとは…！殺す！絶対殺す…！」

怒り狂うみずきをよみに  
梅木は涼しい顔。

そじて、うめひやんに向やうじ袋を差し出す。

「旦那！注文の食材、買つてきましたぜ！  
それ！鍋に投入！」

なんと梅木はすき焼きの鍋の中に  
じやがいもをたくさん投入し始める。

皆は唖然、呆然。

「へへへ…わざわまで、豪華…すき焼きパーティーだつたのが  
一瞬にして、食卓に肉じゃが一品しかない貧相な家庭になつてやん  
の！」

不思議だねえ！

「じゃがいもつて！」

「わしは、すき焼きより肉じゃがの方が好きなのだ。  
子供の気持ちをわからんママを持つと苦労するわいー。」

ふはははー！ へへへへ

またもや、2人の高笑いが響き渡る。

ショックを受けたみずきは

真田に燃え尽き、床に崩れるように倒れた、、、、、

「何しにきたんだ？ 今度は、、、、、」

野口が呆けたよつこつぶやく。

「たぶん、、、リターンマッチでしょう

フアロスが言つと、監が納得してうなずく。

そして、真白になつて燃え尽きたみずきを  
ほつといて、

れつきまで焼きだつたものを  
食べはじめた。

2-9 リターンマッチ（後書き）

「めがねさんと暮らす家がほしいーーー！」

「行くぞ！ それ！」

うめちゃんのけるサッカーボールを  
みずきが追いかける。

七  
七

日ごろの運動不足がたたり、まったく追いつけない。

## 春の公園。

ボールをける2人は幸せそうだ。

無理！絶対無理！

「つめちゃん、私リタイア！」

公園の地面に倒れるみずき。

「しかたないなあ、みずきわん..  
俺が相手しますよー」

「おーいー! つめちゃん!  
未来のパパがあいてしてあげるよー。」

「誰がパパなんですか、  
みずき家の捨て駒にわれてるくせに、  
みずきを見かねてつめちゃんの相手をする野口。」

公園に野口と朋美も現れた。

「ごめんねー、つめちゃんー。」

2人が楽しそうにボールをけるのを見て  
みずきはポツリとつぶやく。

「やっぱ男の子の遊びにはついていけないわ、  
あの子にはやっぱパパが必要なのかなあ、 、 、 」

楽しそうにボールをけるつめちゃん。

「おまえ！筋がいいぞ！さすがわしの手下だけ  
のことはある。

だがな、 、 、 梅木の方がもつとつまいんだぞ！

奴は高校の時インターハイに出るほど  
のサッカー選手だったんだぞ！

ヘディングのしすぎで馬鹿になつたらしいのだが、 、 、 」

「なら、あいつにサッカー教えてもらおうよー。うめちゃん！」

そうだ！あいつの子になってしまおうか！――

やつはいたあと、おひるはひまでも見るがちやん。

しかし、みずきは後ろを向いたまま。

「えーっとたのだ〜。お〜れ、〜、〜、〜。」

「めりやんがみずきの顔を覗き込む。

すむとやこには、

大好きなママが涙を流しながら立ちはぐく姿があった。

「、、、、なつぢやえぱい、じやん、、、、、

「流れの涙を拭いつともせず  
下唇をかみしめる。

「ひえてひひても、あとから涙は溢れ出す。

「うめりやんは、固まつたまま動かない。

「うめりやんの方にうつと手を置き、やれじへ微笑む朋美。

「泣かしかったね、うめりやん。  
わあ、こんな時はじつねばいこんでしょ、うつ。

「一く考えてみて？」

朋美の言葉にうなずくうめりやん。

みずきに近寄り、涙を拭いてあげる。

「嘘に決まつてこるだらうが、  
悪かつたな、うつ。

突然うめりやんをうつと抱きしめるみずき。

いのちをもママを抱きしめる。

「、、、、  
どこへも行かないで、、、、  
」

「あのみずきさんが泣くなんて、、、以外だな」  
野口は少しひっくりした様子。

「ママ、てみなんああなんですよ、」

「わがやんしかこないみやれんことわては  
なむかうじよひ、」

でも、 、 、 きれいな涙でした。

私もあんな涙だったら流してみたいですね。

みあきは涙を流したのがつそのよつこ  
今せつめつせんと楽しそうに遊んでいた。

## 2-11 打ち破られる平和

「野口はいいですねえ、 、 、 」

ファロスが野口に言つ。

「何が？」

「私、 、 、 まじめすぎてつまらないってよく言われるんです。  
ギヤグが寒いんだそうで、 、 、

野口はいいですねえ、 、 、  
なんたつて、 そこにいるだけで面白いんですから、 、 、

天然つて言つんですかねえ、 、 、 日本語で、 、 、

「うるさいー好きで笑われてんじゃねえ！」

たわいのない会話が交わされる野口の家は平和そのもの。

畳下がりのけだるい光に眠氣を誘われる午後。

みずきと朋美も少し眠たそう。

部屋で4人がだらだらと過ごしていると、

じりりりーん！

突然携帯の着信音が鳴る。

「だれだ？着信音、黒電話にしてる奴は！」

そういう野口を、悪い？とばかり睨みつけ、電話に出来るみずき。

電話の声に、顔をしかめるみずき。  
歓迎していない相手からの電話のよしつだ。

「へへへ、、みずきよむ！梅木だけど？

あ！おまえも前は梅木だったつけ！

ひひひひ！  
あーそりゃう！

うめひやんが、俺んとこで暮らすつていて

るんだけど？

おめえのことが嫌いなんだつてよ！

^  
^  
^  
^  
^  
!

「批評」

青ざめた顔で叫ぶみずき。

「あんたがひがんがわづかってゐる……」

「アーティストの世界」

悪いことは、かくするママで、変想がついたそつだ！

もう顔も見たくないって、、、いて…よせよ…

おーーー携帯返せーーー

「アアアアアアアア

電話の声に震えるみすき。

「梅木に騙されてー誘拐されたんだー！

助けてくれー！

今、前に3人で住んでいた家に閉じ込められているーーー

助けてくれ！ 、 、 、 、 、

- - - - -

「へへへへ、、、「つめちゃんが余計な」とを  
言つたようだが、、、

切れてしまつた携帯を握りしめるみづき。

「どうしたんですか？」  
野口の答えにも返答なし。

そして、自分のカバンを「ん」そと探り  
何やら黒いものを取り出す。

「ちょっと、用事できたんで出かけてくるー。  
夕飯には戻るね」

「分りました。まつてますね、、、、つて……！」

みずきさん……マシンガンなんか抱えて  
どうしたんですか！？本物？じゃないですよね？」

「ううん、本物。

ちょっと梅木ぶち殺していくー。」

風のように走り出すみずき。

「勇者様！久々にただ事じゃありませんよ！  
後を追っかけて止めなきやーー！」

朋美は後を追つて走り出す。

「俺たちも行こうーー3人そろって出動だー！」

激高したみづきを追いかけて走る3人。

みづきの鬼の形相を見て  
ただ事ではないなと、悟る野口だった。

## 2・12 3人の家

何の変哲もない路地を入ると  
立ち並ぶのは同じような家の群れ。

その中の一つの家の前でみずきは止まる。

俗に言つ建売住宅丸出しのその家を  
みずきは疎ましそうに見上げる。

「この家、 、 、 いい思い出ない、 、 、 」

新婚当時は希望に満ちて引っ越しをしてきた。

そう思つた。

ところがそうはいかなかつた自分は今  
前夫と子供の奪い合いをしている。

なさけないため息をひとつ。

そして大きく息を吸い叫ぶ！

「ひめちやーーーん！」

驚かす者を呼ぶ叫びは町内中に響き渡った。

その声を聞きつけたのか、梅木が2階のベランダから顔を出す。

「くけけけ！きやがつたか！悪魔！  
！」をよく覚えていたな！

うめちやんを返してほしかつたら  
そのドアから中に入つてこい！

ほれ！、、、はいれ！」

みずきはドアを見つめる。

、 、 、 眼、 、 、 か？

「 みずきわーん！」

ほどなくして、 3人も現れた。

みずきは現れた野口を見つめる。

「 野口、 、 、 」

相変わらずの媚びるよつた皿つか。

その怪しい皿つきませ

野口の黙っていたMつ氣を再び呼び覚ましたよつだ。

「みずきさん！いや女王様！  
あなたのお役に立ちたいです！」

何なりとお申し付けください！…」

野口の昇天しそうな顔。  
かなり嬉しそうだ。

「そう、あいつがヒ、

じゃあ、

ドアに入りしろ！！！」

野口をドアにけり飛ばし、罠のないことを確認した  
みずきは、続いてドアから突入する。

「助けに来たわよ！どこ！、 、 、 、 、 、 、 、 ？」

周りを見渡し驚きの顔を見せる。

その信じられない光景に、みずきはただ立ちつくし  
同じ言葉を繰り返すばかりだった。

「なんで、 、 、 なんで？」



その部屋でみずきは見た。

引っ越しでかたづけたはずの荷物が元通りになつてゐるこの部屋を。

家具や本棚、お気に入りだったカーテンまで元通りになつてゐる。

「みずき、 、 、 」

梅木だ。

すかさずマシンガンを構えるみずき。

「部屋は元通りになつておいた。」

「ひめちゃんも一緒に暮らしたって喜んでる。

セント、みずから部屋に帰んだ、「

誘拐でもされたとでも言わなければ  
おまえは来なこと無いで、」「めん」

黙つて梅木を見つめるみずちゃん。

「くくく、ホーメードマリナ  
もひめさんへやこんでせめんかー

「うめちゃんが墨むなり、  
いこじやねえか」

みずきから消える敵意と殺氣。

梅木も少しずつみずきに寄つてくる。

しかしその瞬間みずきはマシンガンを構え  
トリガーに手をかけた。

何とも言つてやうのない微笑みを浮かべる、、、

「やつぱ、、、この家嫌いだわ、、、

ぶつ壊す！――！」

安全装置をはずし腰に構えたマシンガンから  
放たれる銃弾は

あつという間に、部屋を粉々にしていく。

冷蔵庫、食器棚、壁  
すべて穴だらけだ。

もうもうと煙が立ち込め  
廃墟となつた家にみずきは立ちつくす。

「古い思い出なんかいらない。

だからぶつ壊す。

こんな安っぽい家の小さな思い出なんか  
私がいま粉々に壊した。

うめちゃんと私には  
これからの方がよっぽど大事なの。

昔の良かつたころの思い出にすがって  
家を復元して戻つてこいなんて、、、

そんなんだからおまえは駄目なんだよーー！

梅木！おまえも家と一緒にぶつ壊そつかーー！

逃げようとする梅木を捕まえ馬乗りになり銃口を向ける。  
みずきは叫ぶ！叫び倒す！

「これからあなたは変わるの？変わらないの？

どつちなの？返答次第では、、、、、「

「変わるー変わるよー！仕事もまじめにするし  
うめちゃんも大事にするよー、、、「

「まつたく、 、 あんた、 、 、

あんた、 うめちゃんのパパ、 じやなかつたら  
とつくに殺してるわよ、 、 、

「うめちゃんに感謝しなさい！」

煙草に火をつけほほえむみずき。

マシンガンを放り投げると

平手を梅木に一発。

そして梅木にキスをするみずきだった。

、 、 、 、 、

「これからかあ、 、 、 いい」と言こますね。  
みずせさん」

帰り道朋美が野口に立つ。

「もうだな、 、 、 」

「私たちの「これからせどりなるんじょいねえ、 、 、 楽しみーー。」

野口を見つめる朋美。

その視線を感じながら照れ隠しに下を向いて歩く  
野口だった。

### 3・1 復活！（前書き）

悪な主婦みずきを書きたくなつたので  
また書きました。

### 3・1 復活！

「あ、温泉でも行きたいなあ

みずきはせうかいつたため息をつく。  
なんだかお疲れのようだ。

「最近バタバタして遊びにも行ってないや、  
金もないし、ヒマもない、

貧乏ヒマになじとまゆべ重つたもんだわ」

ひつをじぶつに出社した会社の「スクスクで  
ひつをじぶつに出社した割には仕事もせずボーッとしているなあ。

「仕事もせん気ないなあ、なんだか何にせんやる気が出ない  
体もだるー。そつと言えば胸の谷間もごつつかゆくてこりつー  
うーーこりつーあー水虫もかゆくなつてきたあー

うへえ！！

髪の毛にネットクレスが絡んだあ！…と、、、とれん！…  
わあ！田の中に虫入ったあ！…田がじぶんじぶんわるい！…

お、落ち着くんだ！…そうだこんな時はタバコでも吸つて氣を落ち着  
かせ、、、

ぎやあ！ライターで指に火つけちゃった！…

ぐげえ！！

なんでこんなこいつこいつする！…とが続くんだあ！…！…！

くーーーー！こんな時は、、、野口ー野口ーーじつじつーーー。

「はーーーみずき様ーお呼びです、、、ぐはーーー」

みずきは飛んできた野口をいきなり右フックでなぎ倒す。  
悶絶する野口。しかし野口は気持ち良さそうに快感の笑みを浮かべ  
ている。

「ぶん殴つて少しすつきつした、 、 、

しかし」の心のもやもやはまだ晴れない、 、 、 なぜなぜなの？」

「月一」のアレですか? 、 、 、 ぐはあ…。」

余計な」ことを言つてやがて殴られる野口。  
しかし、 しつこ」こようだが野口は気持ちよさそう。

「ああ！ わかつた！ なんで私いらいらしてゐのかが…。」

突然みずきは叫ぶ！

「最近、 良いママばつかやつてたからだ！

私の本質は悪い…そつ真つ黒の悪いのを忘れていたわ！  
最近悪いことやってなかつたからいらいらしてたのよね！

悪の欲求がたまつにたまつてこるから、なんかとてつもないこと  
たいわねえ、  
ぐえつへへへへー！

不気味な笑いを浮かべるみずき。

「何をするんですか？みずき様」

まつこり顔を腫らした野口がみずきに聞く。

「それは、、、まだ考へてない！」

「どんな悪こじとしたらここか募集します！」

考へておれ！」

みずきはせりつけに残しパチンコへと出かけ行ってしまった。

しかし、ドアを出でに行こうとするその前に立ちはだかる影が一  
つ。

「うーーーーーまた悪い事たへりでるだしぃー。」

長い髪に長い手足。

長いまつ毛の奥にある眼に宿る燃える炎。

「正義の味方、朋美参上！」

悪い子は十字架でお仕置きです！」

みずきちゃんには、つめちやんのために  
これからもずっとここママでいてもらいますー！」

「えーママってなにこへつめちやんてだれえ?  
わかんなーい！」

私は18才独身なのよー！」

そんな子供やあほな旦那なんていません！」

みずきはとぼけてまた出でに行ひたが  
朋美はみずきの腕をむんずとつかむ。

「ビーナスからビーナス見ても18才には見えませんよー、  
悲しいことにー、

もーひー、あなたは何でいつもやうなんですか？

本当は愛情あふれたやさしい人なのに

何でいつも悪の道に行こうとするんですか！」

やさしく諭す朋美だが、みずきはまったく聞いていない様子。

「うるさいわねえ！ そんな外人くさい顔で言われても説得力無いのよー。

でも、 、 、 そういうば、 、 、

あんた、 なんか日本人じゃないみたいな顔してるとわねえ、 、 、  
手足も長いし、 、 、 」

野口もうなずく。

「 そりいえば そりだな。 ほんと日本人なのか？

まさか密入国なんかしてないだろ? なー。」

「勇者様までそんなこと言わないでくださいー。」

私は生糀の日本人ですー。」

「豆腐と納豆を愛する純和風の女の子なんですからー。」

そう力説する朋美だが、みずきと野口は不審顔。

その顔を見ていふうちに朋美もなんだか不安になつて来た。

本当は私、貰い子で、本当の両親は遠くイタリアの地で暮らしているんじゃないだろうか、 、 、

なんだかそう思えてくる朋美。

「 、 、 、 、 、 ちゅうとお母さんに確かめてみます、 、 、 」

携帯を取り出し実家に電話する朋美。

「あ、もしもしゆせん？ 私だけど、  
私つてゆせんの本物の子だよねえ？  
え？」

橋の下で、 、 、 ひりつた？  
だましていぬんなせこ、 、 、 つて、 ざりつこり」と、 、 、 」

みるみる顔が青ざめる朋美。

携帯を持ったままその場に座り込んでしまった。

「なんかさすがに悪いことした気がしてきた、 、 、

朋美！落ち込むな！たとえ君が橋の下で拾われた子でも  
君は君のままなんだから！」

慰める野口だが、朋美は暗い顔。

「私、 、 、 一人ぼっちなんだ、 、 、 わーん！  
本当のママはどうしているの？」

なんだか、いい子になるの馬鹿らしくなつてきた、 、 、  
だつて、一人ぼっちだから、誰も心配してくれないんだもん、 、 、

わーん！

「こうなつたら……」

「こうなつたら、 、 、 なにすんの？」

2人が聞くと朋美は泣き叫んでこう言った。

「グレーティング……悪いこと……一つぱーしてやるーーー。  
みずきさんー悪いこと教えてくださいーーー。」

詰め寄る朋美にみずきがのみずきも当惑顔。

「あ、あんたには無理なんじゃない?  
キヤウにあつてないし、、、」

「そ、そんなことないですよー!  
外に出ていいっぱい悪いことしちゃましょーーー!」

「あー出発」

朋美はみずきを引きずつて外へ出て行ってしまった。

一人取り残される野口。

ふと見ると、足元に転がる十字架がきらりと光っている。

捨い上げ、まじまじと見る野口。

あれほど大切にしていた十字架を朋美は落して行ってしまったのだ。

それを大事そうにポケットに入れる野口。

そして2人の後を追いかけるため、ドアを勢いよく出て行つた。



3 - 1 復活！（後書き）

「の後がつづき、、「まつた

## 3 - 2 無理に悪に染まる

「ほりー、みてくださいよー、みずきさん。私は、車道を歩いてますよー。

思いつきり道路交通法違反だあー悪つて感じーーー！」

うれしそうに車道を歩いている朋美を見て  
みずきはうつとおしゃりに並んで

「そお、 、 、 良かつたね」

「壁にシャーペンで落書きをしても、誰も気がつかないわよーーー。」

朋美はその言葉を聞くとショックを受けて道端に座り込んだ。

悪の道にも染まらず、世の中で独りぼっちになつた自分。

今まで育ててくれた両親が偽物なら

今存在している自分は何者なんだろ？

朋美は自分の存在が宙に浮いたようで  
なんだか怖かつた。

自分の長い髪の毛も、なんだか今は邪魔なだけの存在に思える。

両の眼にジワリと浮かんでくる涙。

「一人ぼっちがこんなにつらいなんて思わなかつた、、、」

そんな朋美の様子を見たみずきは、  
やさしく朋美に声をかけ、、、

るわけもなく、

爆笑していた。

そう、爆笑していた！

卷之三

道端に響き渡るみずきの笑い声。

「あ、あんたおもしろいやでー。」

あ、はははつは！

あつははつははー。」

なおも響くみずきの笑い声。

その様子を見て朋美はさらに落ち込んでしまった。

あつははは、は、、、は

笑うのをやめたみずきはジロリと朋美を睨む。  
たじろぐ朋美に向つてみずきはなおも言葉を放つた。

「あんた、、、こんなに仲間がいるのに、何がひとつなのよー

おかしくてたまらないわー！」

「ヤツと笑うみずき。

その様子を見て朋美も少し笑顔を浮かべた。

「ありがとう、 、 、 」

立ち上がった朋美は涙を拭いて、 また歩き出した。  
しっかりと足取りで、 みずきと一緒に歩いて行く朋美だった。

ねひやー！

### 3・3 やつぱり一人ぼっち？

「いいえ！あなたはひとりなのよー！  
一人ぼっちのぼーりぼりなのよー！」

朋美がその声にふり返る。

「おかあさん！」

そこには、40代ぐらいの女性が立っていた。  
それにもしても、朋美にそっくりである。

「ふふふ、、22年前の嵐の日  
帰り道を急ぐ一人の美女がいた、、、私だけどね！」

ふと見ると橋の下にかわいい赤ちゃんが捨ててあるではないか！  
慌てて駆け寄った私はその子を抱き上げた。

すると、、「

「え？ それって私？」

朋美は複雑な表情で尋ねる。

「うるさいわね、 、 、 黙つて聞きなさい！」

すると、 一匹の野犬がよつて来て  
なんと私に話しかけるではないか！ ！

朋美はうなずく。

「犬は喋るわよね、 、 、 CMとかでよく見るし、 、 、 」

「犬が言つには

その子は私の子供なんですけど

貧乏で育てられなくなってしまった！

良かつたらあなたが育ててくれませんか？

親切で美人な私はうなずいた、 、 、

その時の子があなたなのよ！ ！

つまり

あなたの本当のお母さんは犬なのよ！ ！

朋美はショックで座り込む。

「ああ！ ！ やつぱり！

骨付きカルビとか大好物だし

そうじやないかとおもつてたのよおおー

私の本物のお母さんなぜだいなの？

ああーーー！」

座り込んで泣き出す朋美を見て  
にやつと笑うお母さん。

あきれながら状況を見ていた  
みずきはため息をついて朋美のお母さんに言った。

「でー、本当はどうなの？」

お母さんは笑いながら言つた。

「この子、ちよつとおバカさんだから  
いつもいつもやつてだましてんのよ！」

「の前は本当の親は馬つて！」となつてたんだけど、

なんで毎回だませるのかしら、 、 、 」の子。

親の私が不思議になつてきたわ

なおも泣き続ける朋美。

すると後ろの方から声がする。

「おーーー…やつと見つけたあーーー

朋美ー落し物だぞーーー

野口だ。

走り寄る野口の右手には十字架がしつかり握られている。

「勇者様……」

朋美が叫ぶ！

とたんに笑顔になる朋美。

その朋美の姿を

なぜかお母さんは苦々しげな表情を浮かべている。

「アレが勇者か、 、  
なるほど、 、 、  
」

お母さんはなおも野口を見つめっこる。

その燃えるような眼を

野口はまだ気づいてもいなかつた。



3・3 やつぱり一人ぼっち？（後書き）

ホームはここ

### 3・4 種族が違うのーー！

「勇者様！十字架ありがとうございます。拾ってくれたんですね、、、うれしい。

私のことを気にかけてくれたんですから、、、  
こんなにうれしいことはないわ」

朋美はじつと野口を見つめる。

そのうるんだ瞳を見ると  
朋美が野口をじう思つてゐるかが  
手に取るようになる。

「好きですーー！」

朋美は別に口に出さなくとも  
分かつてゐるのに

改めて野口に言つ。

少し照れて頭をかく野口。

しかし順調な恋には必ず  
邪魔が入ると昔から決まっている。

「ちょっと待ちなさい朋美」

冷淡な視線で朋美を見るお母さんは  
おもむろにバッグの中から  
何かを取り出す。

「朋美、　、　あなたは犬なんだから  
これをつけときなさい。

後、大事なことを  
今あなたに伝えておくわ

お母さんの手に握られているのは  
犬の耳がついたカチューシャ。

「あなたは犬なんだからーー！」

そこのアホ面の彼氏とは  
種族が違うのーー！」

だからけつこんとかできないしいーー！」

あなたとそこのアホ面とは

一生ペット以上の関係にはなれないのよおおおおーーー！」

朋美は顔面蒼白。

まるで体に電流が走ったよーー！」

細かく身体が震えるのを  
必死で止めようとする朋美。

そんな朋美に容赦なく  
犬の耳を頭につけるお母さん。

「あと、言い忘れてたけど  
あなた犬なんだから言葉の語尾に

ワンッてつけるの忘れないでね！」

「ふえっ へへへへ」

自分の頭の上に付いた犬の耳を触る朋美。

自分のどひじょひもない運命、  
いや宿命を心から呪う朋美。

どつあがいても

愛する人とは結ばれない。

だつて、種族が違うから、 、 、 、

「 そりだワン、 、 、

勇者様と私は結ばれない運命だワン、 、 、 、 」

落涙。

朋美の眼から涙がこぼれ落ちる。

過酷な運命に翻弄される朋美の心は  
まるで荒波にもまれる一隻の小舟のよつ

激しく揺り動いていた。

3 - 4 種族が違うのーー！（後書き）

ふつつ

### 3・5 野口は駄目！

道行く人々も朋美を見て不思議そうな顔をしている。

いい歳して犬の耳をつけた  
若い美女が

顔面蒼白になつて  
道端で泣いていたら

目を引かないはずがない。

野口はその姿を見て  
やさしく朋美を慰める。

「まつたく、 、 、 、 こんなところで泣いちゃって  
子供みたいなんだから」

朋美は野口の顔を覗き込む。  
やさしい野口のまなざしに少しほっとする朋美。

「でも、 、 、 勇者様と私は結ばれない運命だワン、 、 、  
でも、 、 、 でも、 、 、 、 、

ペットでもいいから勇者様のそばに  
一生居たいワン！！」

女の子じゃなくてメス犬だけど  
そばに置いてほしいワン！！」

必死に朋美が頼む姿に心を動かされ  
野口もうなずく。

「わかった、 、 、 いいよ。

だから泣かないで」

「ワーン勇者様じゃなかつたご主人さまあ！！」

「朋美じゃなかつたメス犬！！」

「『主人さま！』」

「『このメス犬があーーー！』」

道端で抱き合『う』主人さまとメス犬。

種族が違つても

その愛は変わらないようだ。

だが、その姿を苦々しげに見つめる  
お母さん。

一体何が気に入らないんだろう。  
いらっしゃとした眼差しを2人に向ける。

絶対に！

「お母さんは、おひるどいとおもひます。」  
また鞄から何かを取り出し  
朋美にこいつをさつ。

「ほれワンちゃん！」

卷之三

お母さんはボールを遠くに  
ぶん投げる。

野口と幸せそうに抱き合っていた朋美だが  
そこは悲しいメス犬の本能。

「あ！ボールだワン！」

といひへる「ンー。」

野口の傍らから離れ  
ボールを追いかける朋美。

その様子を不思議そうに見ていたみずきは  
頭をひねりながらお母さんに尋ねた。

「あんた、見てたら  
どうやら野口と朋美が  
付き合つのに反対して、さき離さうとしてるよつて

見えるけど、へへ」

お母さんはなおも憎悪の眼差しを野口に向か  
いつづけた。

「やうやく、あいつだけは駄目！  
絶対ダメなのよー！」

あいつを朋美から引ひ離さなきや、ヽヽヽヽヽヽ

お母さんは  
青白い顔をして

改めて野口を憎悪のこもった眼で見つめる。

「あいつだけは駄目、、、

朋美には、私と同じ思いをしてほしくない、、、  
あいつは、同じ匂いがするのよ

世の中でもつとも  
私が憎んでるあいつだ」

頭を抱えて座り込むお母さん。  
すると突然後ろから聞こえてくる。

「やの憎んでいるあいつとは私のことかね？」

その、甘く低い声にお母さんさびへつとしてふり返る。

一部の隙もなくアルマーニのスーツを着こなし  
きれいに刈りそろえられた髪をなでながら

その紳士は尚も言葉を続ける。

「朋美。騙されてはいけないよ。  
君はまぎれもなく私の子供だ。

愛してるよ、朋美」

朋美はその言葉を聞くと  
喜んで立ち上がり、犬の耳を投げ捨て  
叫んだ。

「お父さんー」

お父さんに走り寄る朋美。

お父さんは胸ポケットからハンカチを出し  
朋美の涙を拭いてあげている。

「ははは、朋美。  
こんなに泣いちゃ 美人が台無じじゃないか」

「おとうしゃーん。」

また泣き出した朋美。

その傍らにいた野口にお父さんは右手を差し出す。

「君が野口君かい？ 朋美から話は聞こえてるよ。  
私が朋美の父だ。よへじく

握手をする野口とお父さん。

「こつも朋美が世話になつてゐるみたいだな。  
礼を言つよ。

そう言へば、君は小説を書くのが趣味らしいじゃないか  
良かつたら私の本も読んでみるかい」

お父さんは野口に本を渡した。

渡された本の題名を見て  
とたんに震えだす野口。

膝をガクガクさせて

脂汗を出しながら野口はお父さんに尋ねる。

「え？え？」の本、ヽヽ、あなたが書いたなんですか？

え？マジで！

「ああ、そうだよ。

私の職業は小説家だからね

「ううそ！－サインください！

俺この小説の大ファンなんですよ！－

すげー！

俺この本毎日読んでるよ－！－

興奮した野口はお父さんに駆けよう  
サインを本にもらっている。

その様子を見ていたみずきはお母さんに尋ねた。

「ふーん、あんたの旦那偉い人なんだねえ？  
それなのになんでそんなに嫌ってるの？

わかったー浮氣しまくつてるとか?」

「いえ、、、あの人は浮氣はしないわ、、、」

やつまつてお母さんは

先ほど野口がもひつた本をみずきに差し出す。

その本を手に取ったみずきは  
表紙をなんとなく眺めた。

、、、

表紙を眺めてなぜか違和感を感じるみずき。

その表紙には「いつ書かれてあった、、、

「乳首にアソアソ」はんのせて食べてみました!」

作 ポニッシュライス君

### 3・7 みやわせ、あつやけり裏切る

「ライス先生！次回作はまだなんですかあ……俺待ちきれないつすよ……」

「ははは、よく言われるよ。

次回作は、本格的に賞を狙つてこいつと戦つてね。

気合を入れて書くよ。ははは……」

ライス先生と野口は楽しそうに話しているが  
みずきは本を眺めたままフリーズしている。

そして、恐る恐る本を開いて読んでみる、 、 、

「乳首にアツアツ」はんのせて食べてみました……」

やつぱ無理！－無理！むりのすけ－！－

乳首黒くなつてゐたひめひめちやん…

- 1 -

みずきは静かに本をゴミ箱へ投げ捨て

ため息をついた。

「おかあさん、、、気持ちよーくわかった。

確かに芸風が野口にそつくりだわ、

あなたの田那。」

お母さんはその場に泣き崩れた。

「だから、あこつだけは付けてほしくないのーー！  
変態田那を持つて苦労してほしくないのーーあの子こめーーー！

所で

みずきさんーお願いがありますー！」

みずきに懇願するお母さん。  
当惑顔のみずき。

「あの野口を朋美から元を離していくださーい！  
お願いします！」

「でも、、、2人は愛し合つてゐるわけだし  
なりゆきに任せせる方が、、、」

お母さんはおもむりに

バックから札束を出してみずきの前でちらつかせた。

「あいにくつちは夫がベストセラー作家なもんで、、  
お金はありますのよ。」

とたんに燃え上がるみずきの眼の奥の炎。

「まつかせてください！」

あの腐れ野口とおものお嬢様が付き合つなんて

身分が違いますよねえ！－！

前からそう思つてたんですよーー。  
ほんとー！

きつちり別れさせて見せましょーー。  
ついでに野口は再起不能にしようとしますーー。」

くくく、  
悪魔的な笑いを浮かべるみずき。

あのみずきに田をつけられてしまつた2人。

2人にとっての最大のピンチであることは  
間違ひなかつた。

### 3・8 決戦

「君の小説、読ませてもらつたよ。  
なかなか筋がいいじゃないか、気に入つたよ」

そう言いながらお父さんは「コーヒーのカップに手をかけた。

オフィス街にあるオープンカフェ。  
心地よい風が吹き抜ける天気の良い日に  
野口はお父さんと「コーヒー」を飲みながら  
小説談義をしている。

「マジッすか？あざーつす！

いやあ自信作をほめられるとうれしいなあ

「でもこの、必殺ぐるぐるパンチを受けた  
主人公がむつはーと言つところを

むつひーにした方が

主人公の心象風景がよく表れて

読者にも伝わるんじゃないかな?」

「なるほど! さすがプロ!  
参考になります!」

2人が夢中で話していると  
突然強い風がオープンカフェに吹きすぎた。

吹き飛ぶコップやナップキン。

2人は風をやり過ごした後  
顔をあげると

そこには一人の女性が立っていた。

その女性は周りが凍りつきそうな笑みを  
浮かべ野口に近寄つてくる。

「悪魔登場よー野口!」なんといふで何してんの?」

みずきだ。

みずきは野口の膝に座り  
つるこだ瞳で野口に尋ねる。

「私、 、 、 やびしかつた、 、 、  
最近全然かまつてくれないから。

あなたが十字架の女の子に浮氣するからよ、 、 、  
あなたは私のことが嫌いなの?」

「いいええーー、 そんなことはないんですけど  
みずきさんは、 、 、 旦那さんがいるし、 、 、

やつらの野口をみずきはこきなり平手打ちをして胸ぐらをつかむ。

「旦那は関係ないのよ。」

私のことが好きかどうか聞いてるだんなのよー

れあー答えなわーー好き?嫌い?どっちなのよー

みずきに詰め寄られだらだら汗を流しながら困っている野口。

するとまた聞きなれた声が  
屋下がりのオープンカブに響き渡る。

「悪魔よ勇者を解き放ちなわーー

みずきさんー今度といつ今度は許しません！」

首にかけられた十字架を右手に握りしめ  
顔を真っ赤にして、みずきを睨みつける。

そこには烈火の如く怒った朋美が立っていた。

「みずきさん！ いつたいいくらでもお母さんに  
買収されたんですか！」

いくら金に田がくらんだからと、いつて  
勇者様を誘惑するなんて！ ！

梅木さんやうめちゃんがそんな姿を見たら  
どう思つか考えたことがありますか！ ！」

「ママーーーーがんばれーーー！」

「みずきよおー！てめえのすべてを出し切って  
頑張れよおーひつひひひ！」

声のする方に思わず振り向く朋美。

そこには梅木とつめちやんが立っている。

「朋美さんよおー！俺たちは愛より金の方が大事なんだよおー。  
だからわくつとそこの馬鹿と別れてくんないかあ？」

「悪こよひこよひしねえからよおーひつひひひ！」

「みずきよー、悪いが野口と別れてくれー！  
わしはウイーをネットにつなぎたいのだ！」

その言葉を聞きがくつとつながる朋美。

「ええーーつめちやんまでー！」

この腐れ家族が、 、 、

わかりました  
まとめて退治してくれます！

かかってきなさい、 悪魔どもー。」

天使と悪魔一家が対決しようとしている中  
すくっと立ち上がったお父さんが中に割って入る。

「待ちたまえ。 こゝは 一 回私に勝負を  
預けてくれないか。

「の店にも迷惑がかかるからな。

朋美、 いいな」

お父さんにそう言わると朋美は  
力が抜けたようにイスに座り込んだ。

しかし、悪魔は黙つてはいない。

「つるわこわねー」ちは一家の生死がかかってるのよー。いまずぐ朋美を始末して金が欲しいのよー！」

お父さんはその言葉にうなづくといつぱつた。

「しかし、こじのまま天使と悪魔が戦うと死人まで出かねん。

しかるべき場所で正々堂々と勝負をつけると云つのはどうだらうか？

勝負方法は私が考えよう、

決着をつける日は明日ー。

場所は東京ドームといつぱつとでどうだねー？」

みずきはその言葉を聞くとにやつと笑う。

「ははは、いいわよ。

明日待つてるわよー朋美。  
ハツ裂きにしてくれるわー！」

わはははは

高笑いを浮かべながら  
悪魔たちは帰つていく。

その姿を眺めながら野口はまつりと  
つぶやいた。

「観客の前で決戦か、 、 、  
なんか、連載に行き詰つたマンガつて  
よく戦いでごまかしてたけどこれって、  
、 、 、  
」



### 3・9 今日は休み

田覚ましの助けを借りず、田を覚ます。  
これが休みの田の楽しみの一つだ。

今日、野口は休み。

すっかり強くなつた田差しに、せかされるより、  
野口はベッドから出た。

昨日からつけっぱなしのテレビ。

朝のくだらない番組が流れる中  
田をひすりながら野口は冷蔵庫から

アイスコーヒーを取り出す。

「あ、テレビ消せ、  
朋美に見つかったら怒られるよ。

あこつねんねりひつねたこからなあ

野口は電気の無駄使いをして怒る  
朋美の顔を思い浮かべながらテレビを消す。

飲み干したアイスコーヒーの感触が  
まだのどに残っている。

なんでもない休みの朝。

そんな朝でも、起きて一番に  
朋美の顔を思い出した野口は

朋美の存在が自分で  
大きくなっていることに気が付きはじめていた。

ピンポン

玄関からチャイムの音が聞こえる。

現れたのはやっぱり朋美だ。

休みの朝、ここに朋美があらわれ  
決まってどこかへ連れて行けとせがむ。

野口にとつていつもの変わらぬ情景。

今の野口にとつてこの情景が  
無くなることは考えられない。

部屋に朋美があらわれるのは  
それほど野口にとつて日常になつていてるのだ。

これが人を愛するところとなんだろう。

朝のぼんやりした頭でさう野口は考へる。

だか、そんなことを考へているとは  
おぐびにも出れない野口。

「ああ、なんだよ?  
俺は眠いんだけど?」

照れ隠しなんだろうか

付きはなすような態度の野口。

「のーべーちーさん  
あーそーびーまーしょー・

ほらー外はこんないい天氣ですよ。  
こんな日は外に出なきゃ損ですよ。

そこの市民プールでも行きませんか?  
今年初泳ぎしましうよお

「市民プール? そこのか?

あんなガキンちよしかいてないプールに行くのか?  
なんか気が進まんなあ、 、 、 」

「いいじやないですか。

行きましょうよ! 楽しいですよ、 きっと

それに入場料激安! 200円ですよ!

食べるものにも困っている野口さんには  
ぴつたりのバカנסじやないですかあ?」

それを聞いて睨みつけ怒つてる野口。

そんな視線を全く無視して  
腕を引っ張りお願いをしている朋美。

そんな朋美を見て野口は思つ。

やつぱり毎週お決まりの  
これがなくなるなんてことは考えられない。

なくなつたらちよつとさびしい、 、 、

しぶしぶ野口は出かける準備を始める。

顔を洗い歯を磨く野口を横目に見ながら  
朋美は幸せそうな笑顔を浮かべている。

「あれ？ 所で今日なんか約束なかつたつけ？

大事な用が何があつたよつな、 、 、 「

それを聞くと朋美は大きく首を振つて

野口を見つめる。

「大事な用事なんてありません。

野口さんと2人で過ごす時間が方が  
私にはよっぽど大事です。

外野がなんと言おうと

私には関係ありません！

私は野口さんが好き。

それだけでいいんじゃないですか？」

歯を磨きながら野口は微笑む。

「・・・それもそうだな」

「じゃあ、歯を磨いたら出発しましょー。  
今日は楽しむぞおー！」

部屋のカギを締め2人は出かけて行つた。

「今日は面白いこと言わないんですね？」

野口さん

「2人の時はなし」

どこから見ても仲の良いカップルは  
夏の日差しが照りつける街へ出かけて行つた。



なぜか野口はうつろな顔。

隣にいる朋美とも視線を合わせず  
テレビばかり見ている。

テレビから流れるのは  
くだらないお笑い番組。

その番組を野口は笑いもせずじっと見てている。

「なあ、朋美」

「なあに?」

朋美はポテチを食べながら  
答える。

「朋美はギャグをまねするのが大好きだよなあ?」

「うふ。ルネット・サーヌスとかいつも話しているよ」

「わうだよなあ、」

野口はさう言つとテレビに映る映像を指さしていづづづつ。

「じゃあ、このギャグはマネしないのか?」

なぜなんだ?結構有名だぞ!」

テレビからはおっぱい飲みたーいの?  
といつ下品なギャグが流れている。

顔を赤らめる朋美。

「野口さん、これでできませんよ  
なぜそんなこと話つんですか?」

野口は口元をゆがめにやりと笑つて朋美に向つてこう言い放つた。

「ふふふふ、よくぞ聞いてくれました。

実は俺は朋美のおっぱいが飲みたいんだよおおお！  
さあ！ いえ！ 早くいえ！

そして今すぐ脱げ！ふえつへへへ！

どこからかガラガラとおしゃぶりを出してきた野口は  
よだれをだらだら流しながら朋美へと迫る。

最初は困惑していた朋美だつたが  
静かにうなずくと胸元のボタンを一つ一つ外していく。

卷之三

野獣と化した野口が一歩また一歩と朋美に迫つてくと、

じりりりり

目覚ましの乾いたベルの音にガバッと飛び起きる野口。

息は荒く全身汗びっしょりだ。

恥ずかしい夢を見てしまった。

もじこんな夢を見ているなんて朋美に知れてしまつたら、

「汗びしょびしょですよ。着替えっこて置いときますね」

毛を逆立て、田を飛び出さんばかりに声のする方を見る野口。  
そこには、朋美が立っていた。

夏なので当然薄着の朋美に思わず田をそらす野口。

「驚かして！」めんなさい。カギが開いていたんで  
入つてしましました。

それにしても不用心ですよ！『じまりはしつかりとしてくださいね！

それと、 、 、 」

「それと、 なんだ？」

野口は不機嫌そうに聞く。

「申し訳ないんですけど、、私赤ちゃんがないので  
おっぱい出ないんです。

出るよひになつたら必ず畠上がつてもらいますから、、、

「めんなさこ、寝言聞いてしました」

それを聞いた野口はまるで犬のつんじを踏んでしまった  
小学生のような表情。

眼には涙をいっぱいためている。

「朋美、、、聞いていたのかあ、、、」

切ない声で朋美に聞く野口。

「私の中でよかつたら飲む？」

「20年前に朋美にあげて以来だから出るかわからんけど」

またまた毛を逆立て切ない表情で声のする方を見ると  
朋美の横にはお母さんの姿がある。

般若のよつな顔をしたお母さんはなおも言葉を続ける。

「あんたたちが、対決をすっぽかした日の夜から  
お父さんの姿が消えてしまったのよねえ！」

この紙切れ一枚を残して！

「あんたお父さんと変態仲間でしょ？  
なんか知らないの？」

「当然野口には身に覚えがない。」

そして、お父さんの残した紙切れを読んでみる。

「お母さんへ

お父さんは~~手~~の地図を手に入れましたーー！  
やつほーーー！

んでもつて宝を探す旅に出ますので  
あとはよろしくーー！

じゅあねーー！

宝つて、  
今時、  
、

「野口さんーーいえ、勇者様！

行方不明のお父さんを探す旅に出てくれませんか？」

野口は懇願する朋美の胸に光る十字架を見つめながら複雑な気持ちでそこに立ちつくしていた。

おつぱいが宝を探せと言っている、 、 、 、 、 、

野口はまつりとつぶやいた。

#### 4・2 いつも考へています！

「ライス先生が宝を探しに行つて行方不明があ、 、 、  
朋美は心当たりないんだよなあ？」

「勇者様、 、 、 私もわからないんですよ  
心配です」

2人は結局お母さんに命じられ  
お父さんの行方を追うことになった。

野口の部屋であれこれ悩む2人。

すると、 突然ドアをじんじん叩く音がする。

その尋常でないドアの呑きつぶりに驚いてドアまで走る野口。

慌ててドアを開けるとそこにはファロスが立っていた。  
顔は顔面蒼白、 ノートパソコンを手にしてファロスは震えて立つて  
いた。

「どうしたんだ、ファロス。何か手掛けかりでも見つけたのか？」

野口が尋ねるとファロスは震える声で話しだした。

「あああ、私は恐ろしいものを見てしました、  
とにかくこれを見てください！！」

部屋に入つて来たファロスは机の上にノートパソコンを広げ  
スイッチを入れた。

ファロスは動画を再生する。  
画面に見入る三人。

そこには、・・・

布団の中でのうなされる男。

男は何やら、うなされていいるようだ。  
繰り返し寝言を言つてゐる。

卷之三

朋美のおひさまにあひつかう、おいしぃなあーーー！」

- 1 -

「、、って、俺じゃねえかあ！！  
どこの映像を入手したあー！」

野口はあるで先生におかあわると呼んでしまった小学生のよつた  
切ない表情で叫ぶ。

「とある」婦人にこの男を社会的に抹殺してほしいと  
依頼があつたもんで、youtubeに投稿してみました！

もう一〇〇〇〇アクセスありますよ！すいこですねえ！

私の用事はこれだけです！じゃあ

風の様に走り去るフアロス。

「な、何しにきたんだ？あ、い、い、

野口は疲れた声で言ひ。

そして朋美はなぜか野口を疑わしそうな眼で見ている。

野口に何かを言いたそ  
うだ。

「なんだよ朋美、その眼は！」

朋美はなおも野口を見つめて、「ううん。

「もしかして、 、 、 鷹口れんこつむじな」と考へてゐるんですか？

「んなエツチな」と、 、 、

「

朋美に言われた野口は真っ白になつて燃え尽き床に倒れこむ。

そして

絞り出すよつた声で黙口せりへと云つた。

「。。。はい、いつもおえています、、、すいません」

すべてを白状した野口の魂が今  
入道雲浮かぶこの夏空に昇天していった。

男なんていふなもんやー。



#### 4・3 深キヨンスイッチ

「いらっしゃいませー何名様でしょうか?」

野口と朋美はファミレスにやって来た。

「2人です、 、 、 」

野口がそう言つと店員はにっこりとうなずく。

「大人1名とおっぱい星人1名様3番テーブル  
にこり案内します!」

「ふふふ、 、 、 見ましたよ」

店員はいやらしい目で野口を見る。

「ハハハ、 、 おっぱいってなんだよーー  
わーんーー!」

野口は朋美の手を引いて

逃げるよつに店を出でいく。

なんと言ひ漫透力。

恐るべきゴーチューブ。

今や野口は街中では知らない人がいないほどの  
おっぱい星人になつてしまつたようだ。

すれ違う人も野口を見てくすくす笑つてゐる。

「わーー！おっぱい星人がきたーー！にげるーー！」

子供達も野口を見るとそう言つて走つて逃げていく。

野口は道端で頭を抱えて座り込んでしまつた。

「うう、うう、もう俺の人生終わりだあ！

こつやつて俺は一生世間から変態扱いされるに違ひないーー！

うえーん！

ライス先生！俺はどうしたらいいんですか？  
こんな時に先生がいてくれたら勇気づけてくれるの！

ライス先生！いつたいどこに行つてしまつたんですかあ！？

悲嘆にくれる野口。

「そうですね、何か手掛かりでもあつたらいいんですけど、」

朋美も不安そうな表情。

そんな2人のもとへ

またもや、ファロスが息を切らせながら走り寄つてくる。

「おっぱこわーーん！

「これを見てくださいーー！」

お父さんの手がかりを発見しましたよーー。」

ファロスの手にはまたもや  
ノートパソコンがある。

嫌な予感がする野口。

「おひさまちゃんはやめてくれ、・・・、  
所でどんな手掛けりなんだ？」

「お父さんのブログを発見したんですねー。」

見てくださいーー。」

ファロスはパソコンを立ち上げる。

すると画面にお父さんのブログが映し出された。

＼お父さんスイッチよりも深キヨンスイッチを作ってくれと教育テレビにお願いするブログ＞

いっやあ、教育テレビでねー！

押せばお父さんが何でも言ふことを

聞くってスイッチがでくるんだけどね

その深キヨンバージョンを作つてほしいわけ？ライスとしては。

＼甘えるボタン＞とか

＼やせしく怒つてくれるボタン＞とか

押したいのよ。ライスはね。

だからあ教育テレビに何回も投書したんだけど  
なーんの返事もないわけよ。

決定。

爆破。

教育テレビ。

庶民のややかな意見を踏みにじる?  
怖いねえ、、、巨大組織は。

ぼーんと言つちやう前にい  
今からテレビ局に突入してきまーす!!

あ、そ、う、ひ

くせし、くせし、添、い寝、して、くれる、ボタ、ン、も、待、つ、も、り、あ、一、つ、と、一、

じ、や、あ、ね、え

、、、

「私の見せたかったのはこれだけでーすーじゃあー！」

ファロスはまた風のよひ  
走り去ってしまった。

また  
取り残された2人。

「な、何なんだ？今のは、  
なんの手がかりにもなつてないじゃないか、  
」

「いえ、、、勇者様。お父さんは  
テレビ局に抗議をしに行つたつてことはわからましたよ。

抗議の内容はさっぱりわかりませんけど、  
、、

とにかく行つてみましょっ！教育テレビに

「そうだな、、、とにかく手がかりは  
それしかないようだし」

とにかく手がかりを得た2人は  
テレビ局へと向かう。

そこにお父さんはいるのだろうか?

とにかく、深キヨンスイッチを  
ぜひ作つてほしいということだけは間違いないようだつた。



# 夏の街に繰り出した2人。

仲良く歩く2人の後ろに  
やつぱり忍び寄る影。

なにバツくれてんだよ！！

めちゃめちゃに怒っているみずきが姿を現したのだ。

二〇一・野口！

アーヴィング

待たされた時間を返せ！－

「今日はこそこは決着をつけさせてもらひつわよー！」

みずきは大きく息を吸い込んでの野口に尋ねる。

「さあ天使が好きなの？」

それとも

悪魔が好き！

なの？

「はつきりしない！」

野口はその言葉にうなづくと笑つて  
朋美をひひひと見る。

朋美は顔を赤くして  
言葉を待つてゐる。

「ああ……答えなさい？」

「どうなの」

答えをせかすみずき。

野口は観念したかのように皿をつぶり  
息を吸い込み大きな声で答えた。

「やひよつ、やひよつ、やひよつ

悪魔が好き！！！！」

その言葉を聞いた瞬間  
愕然とする朋美。

「なぜ？なぜなんですか？」

なぜ悪魔なんかが私より好きなんですかああ」

泣きそうな朋美を見て  
ちょっとびりいたずらっぽい笑いを浮かべた

野口せりふ

「厚かましいやつだなあ、 、 、

自分を天使だと思っていたのか?  
最初から言つてるだろ。

朋美は正真正銘

「十字架を首に下げた悪魔」

なんだよー

そして俺はその悪魔が好きなんだ！」

顔を赤くする朋美。

「私が悪魔と言つのはちょっと引っ掛かりますが、ー、ー、

とにかく野口さんが初めて私に好きだつて言つてくれた。  
うれしーーいーー！」

野口に抱きつく朋美。

その様子をあきれ顔で見ている見ているみずき。

「なんかばからしくなつてきた、 、 、

「バイトでも探しにいこ、」

「おまえの、うるさいな、おまえ。」

その後ろ姿にむかって朋美が叫ぶ！

「ありがとう！みずきさん！」

みずきはふり返らず  
ちゅっと手をあげ

そこから去つて行つた。

何かと波乱はあつたが

落ち着くところには落ち着いた2人。

これからも波乱はあるだろ？が

仲間に助けられながらも  
乗り越えていくんだろう。

そして最後に一言。

がんばれ野口！

＜おわり＞

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8348d/>

---

彼女は悪魔！

2010年10月21日23時26分発行